

霊岸島とそれを取り巻く水辺について - 亀島川及び霊岸島の再生 -

目次



基礎研究1. 霊岸島の歴史

基礎研究2. 亀島川の歴史

基礎研究3. 新川地域の現在

三井ツインビルについて

日比谷稻荷神社について

通勤船について

東京クルーズ

再生計画の提案

事例研究1. 水辺の公開空地

提案1. 三井住友ツインビルの公開空地

事例研究2. 水辺の空間利用

提案2. 日比谷稻荷神社

24U1160 細田卓志
24U1167 望月颯希
23U1302 李奕能

1636(寛永13)年頃 江戸幕府の天下普請により埋立(元は隅田川の中洲)

霊巖寺が建立(高層・霊巖上人)→「霊岸島」

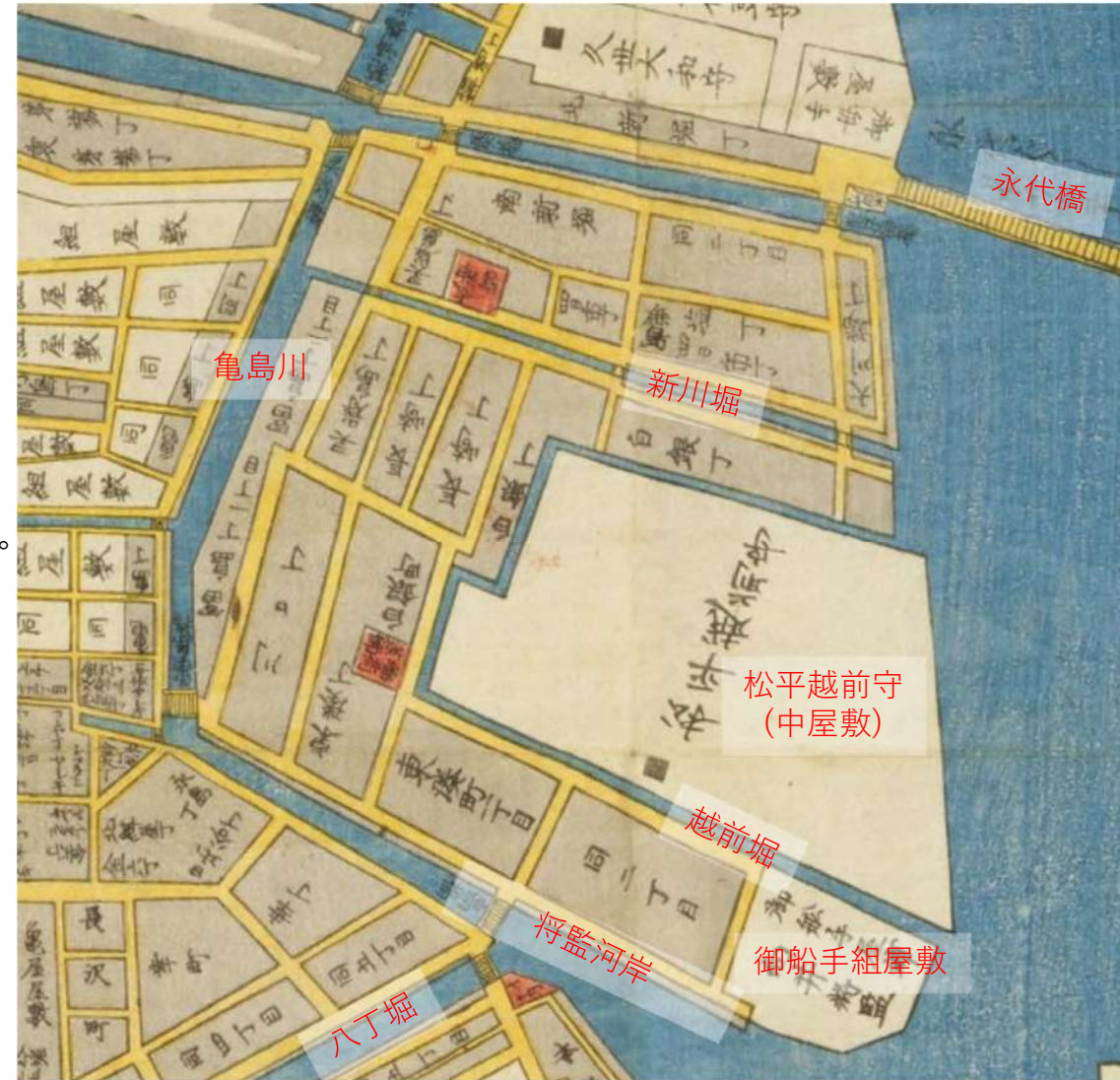
1657(明暦3)年 明暦の大火により一帯が焼失→霊巖寺は深川へ移転
跡地には、町家が発展

1660(万治3)年 物資の陸揚げの便宜を図るため、
河村瑞賢が新川堀を開削、水上交通の拠点となる
↓
畿内からの廻船が入るため、江戸の港として栄える

越前堀沿いには御船手組屋敷が構えられる。(筆頭船手頭・向井将監)
→戦時は幕府水軍、平時は幕府御用船の管理と出入する船の見張りのため南端には船見番所が置かれ、霊岸島町には船大工が多く居住。



長谷川雪旦「湊稻荷神社」『江戸名所図会』



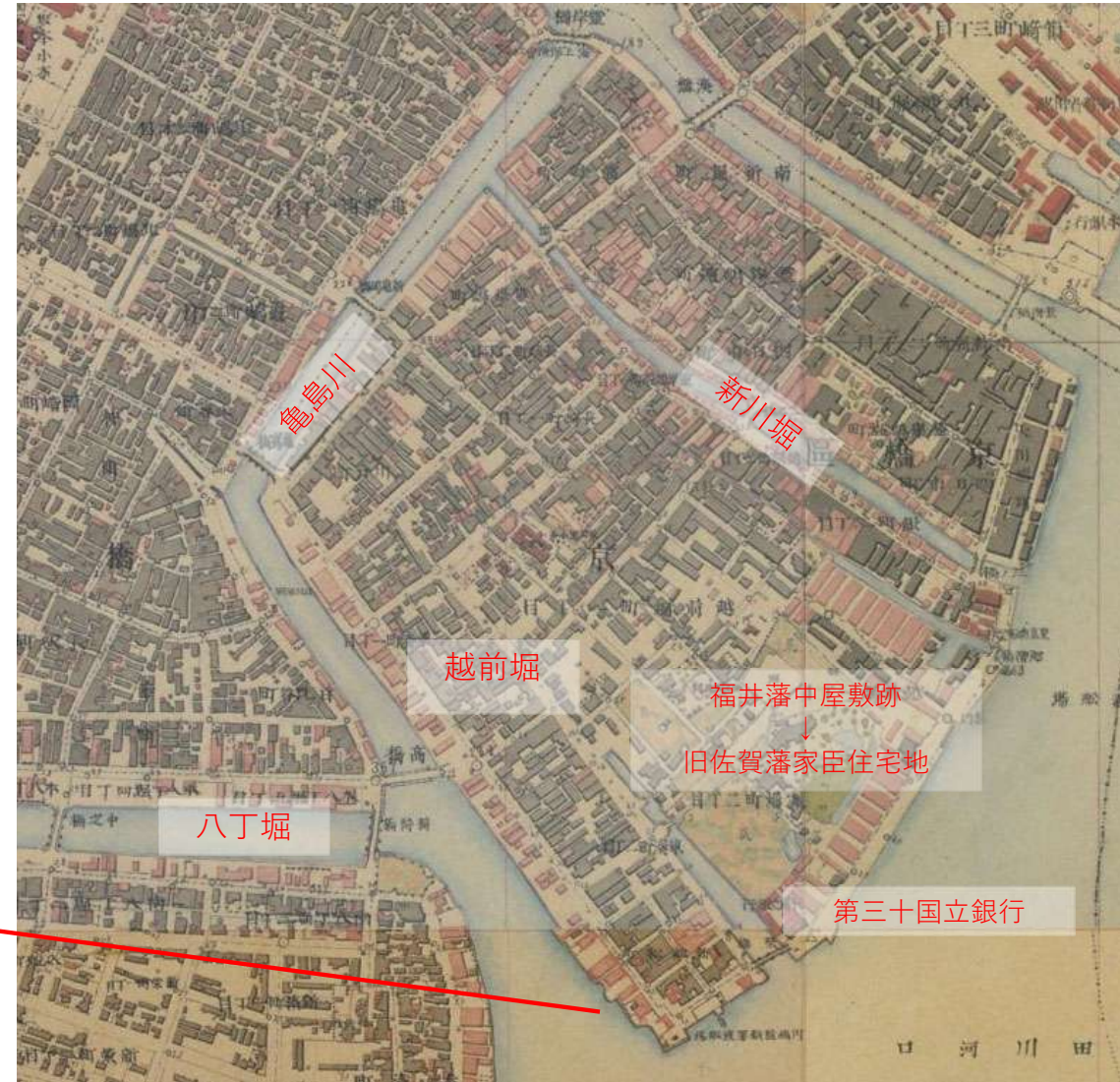
「築地八町堀日本橋南絵図」『尾張屋版江戸切絵図』1849-1862

- 1877(明治10)年 明治維新後、福井藩の中屋敷跡に旧佐賀藩が入る
↓
旧佐賀藩士・深川亮蔵が第三十国立銀行を創設
- 佐賀藩家臣地にあった越前堀は、明治期の市区改正などにより、埋め立てられていく
- 1889(明治22)年 渋沢栄一により、**東京湾汽船会社** 設立
↓
御船手組屋敷跡に、**霊岸島汽船発着所**を設置
- 1892(明治25)年 月島築造、陸上交通の発展
↓
霊岸島地区は港湾としての機能は徐々に薄れていく



(版画) 斎藤むさし「東京湾汽船霊岸島発着場」

* 中央区立郷土天文館蔵



参謀本部陸軍部測量局『五千分一東京図測量原図』1884

1919(大正8)年 旧佐賀藩家臣住宅地を住友倉庫が購入

1924(大正13)年 関東大震災
この頃、越前堀はほぼ全て埋立てられる

～1936(昭和11)年 房総半島、伊豆半島、大島、八丈島などに向けた
海上交通を運営(海上航路の拠点という伝統の保持)
↓
その後、芝浦埠頭へ移り、「東海汽船」となる。

1953(昭和28)年 竹芝栈橋待合所が完成。

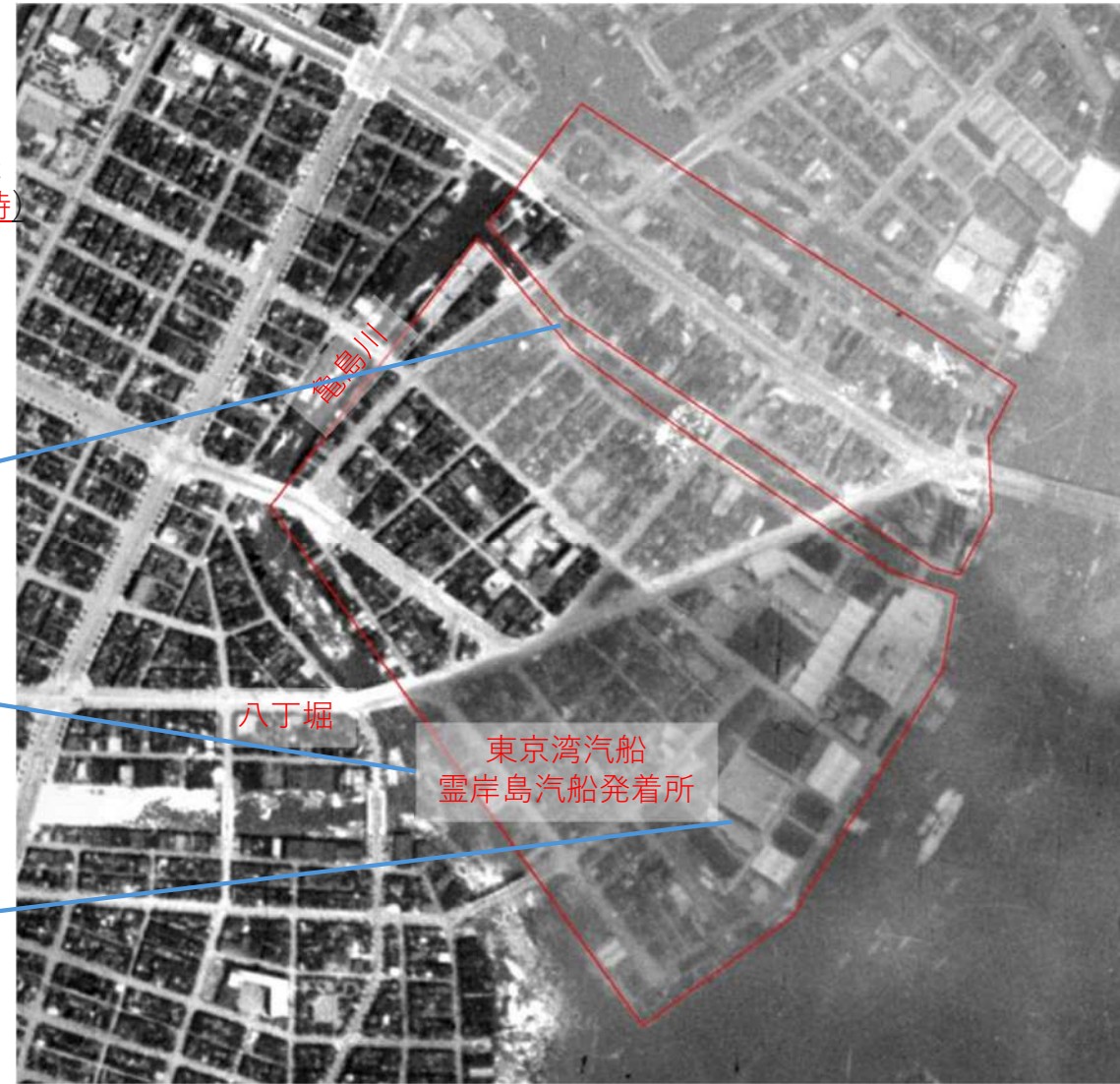


霊岸島汽船発着所



住友倉庫 (越前堀倉庫)
1921年竣工
1985年まで使用
写真：『住友倉庫百年史』p.49

新川 (堀)



国土地理院地図 1936-42 航空写真

1945(昭和20)年 太平洋戦争

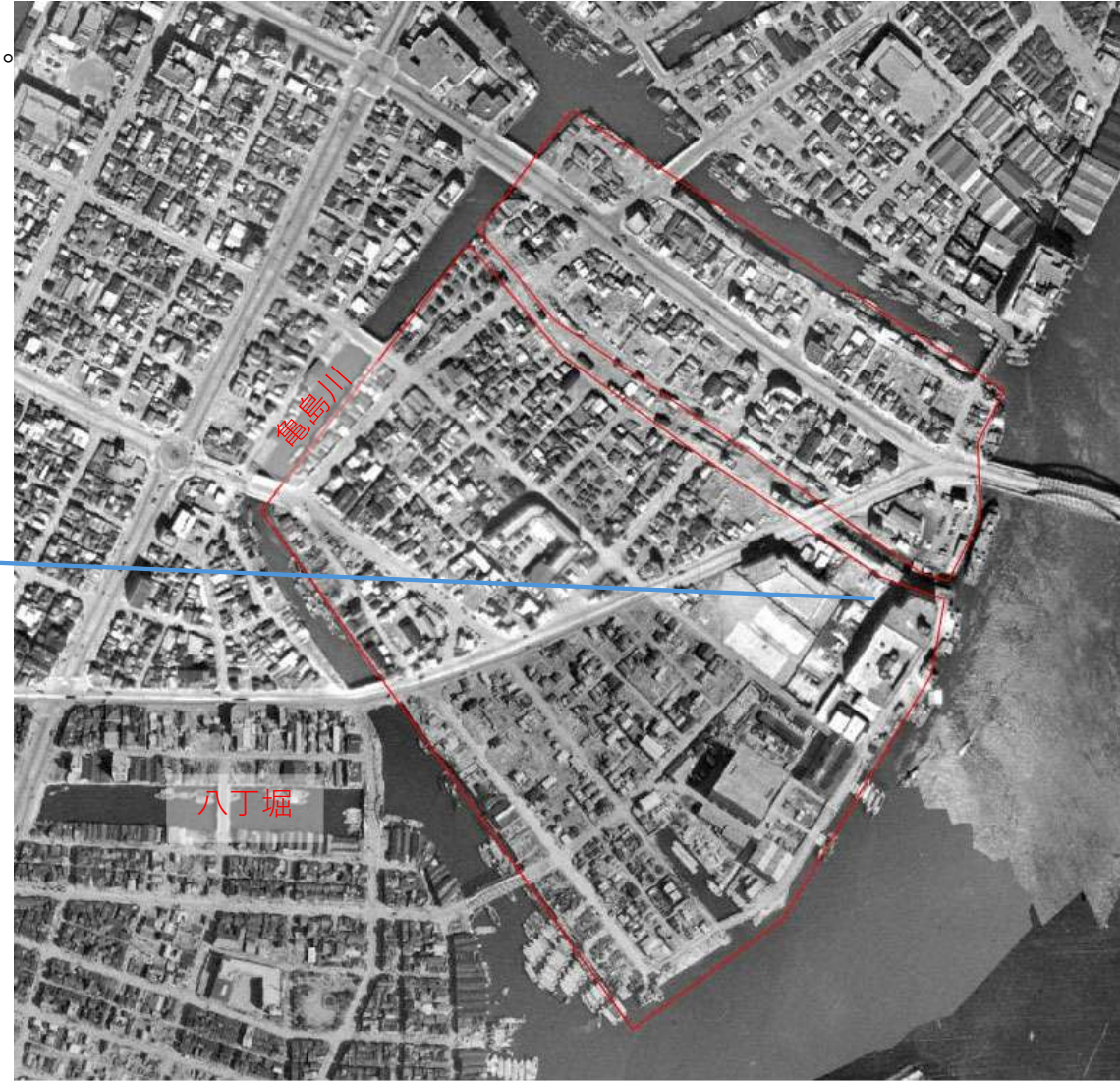
1948(昭和23)年～ 戦争の残土処理のため、新川の埋め立てが始まる。
1949(昭和24)年 新川は完全に埋め立てられる



中央区立京橋図書館所蔵



“新川之跡”碑



国土地理院地図 1945-50 航空写真

氾濫を防ぐため亀島川の上流口と下流口に水門を設置

1968(昭和43)年 亀島川水門 設置

1971(昭和46)年 日本橋水門 設置

～1972(昭和47)年 八丁堀の埋め立て



日本橋水門(東京都建設局HPより)



亀島川水門(東京都建設局HPより)



国土地理院地図 1987-90 航空写真

江戸の河岸地利用の覚書

1658(明暦4)年 河岸への小屋、雪隠の設置を禁止
川へつきぬけ、京間4間明け置くことを定める

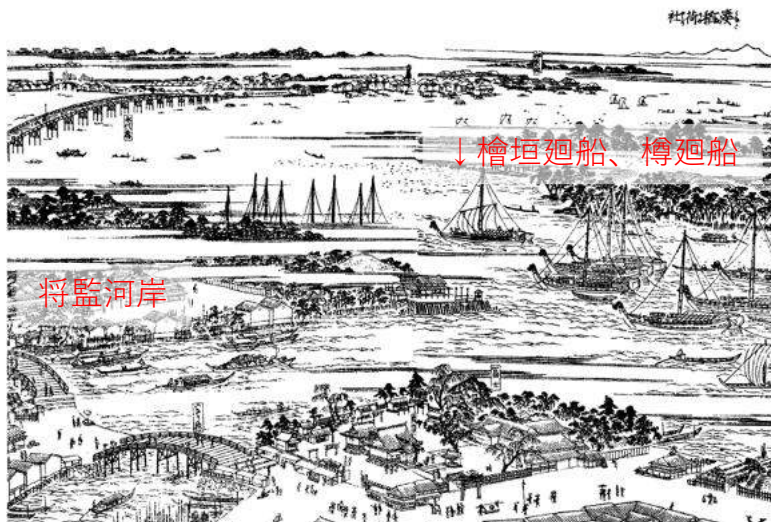
…しかし、荷積みのための小屋、納屋等が建設される

1745(延享2)年 河岸蔵建築等町年寄二届出令により、蔵の建設が正式に認可される。

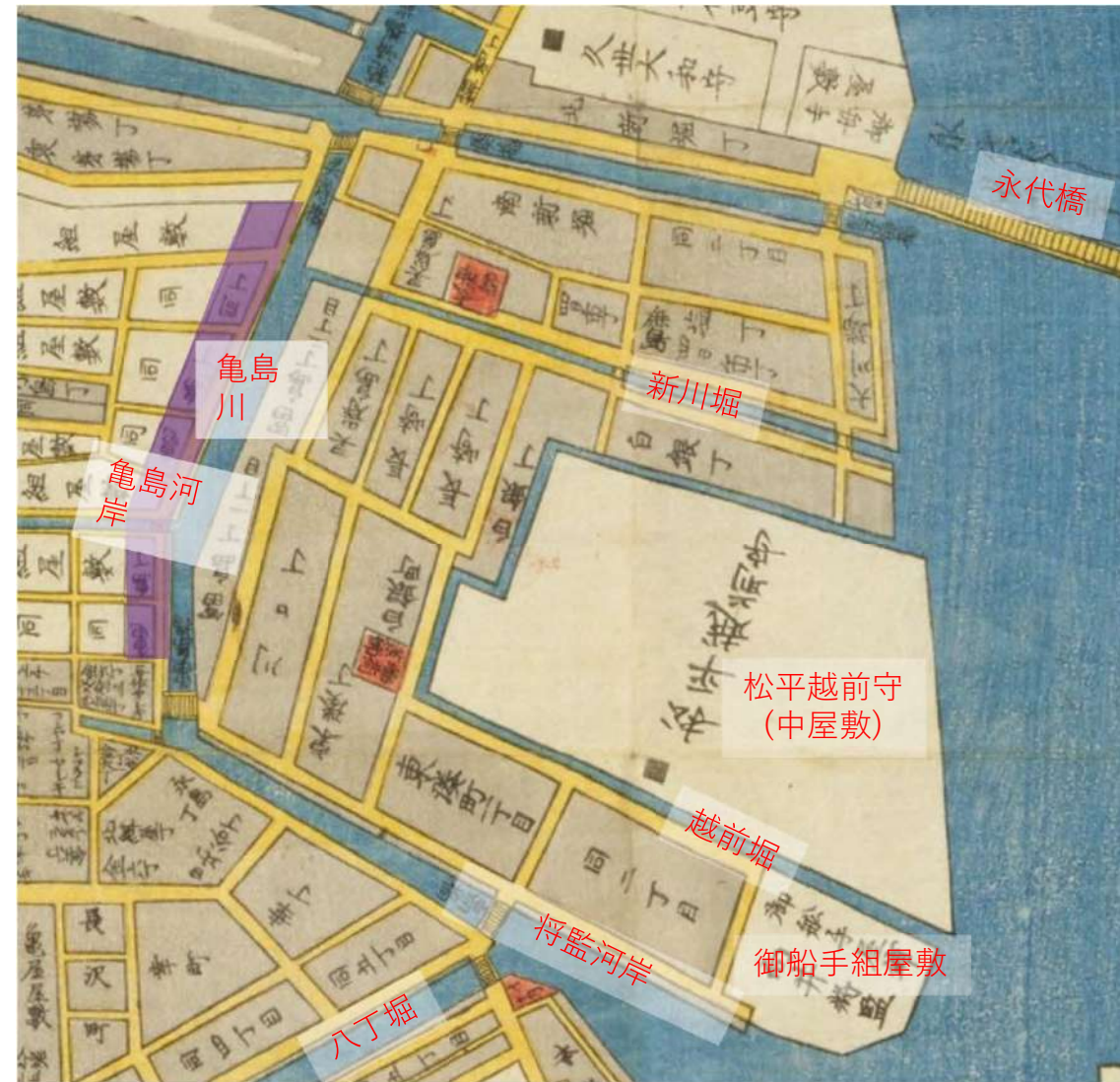
1783(天明3)年 河岸地は公儀地面として公有地に規定される

亀島河岸の場所には江戸期には無名の河岸が存在していて、江戸湊には上方からの菱垣廻船、樽廻船が泊まっていた。

将監河岸は江戸城への物資搬入の拠点で、御船手組屋敷とともに江戸城への物流、警護の要所であった。

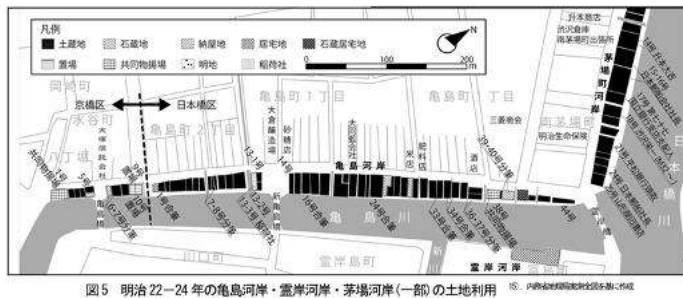
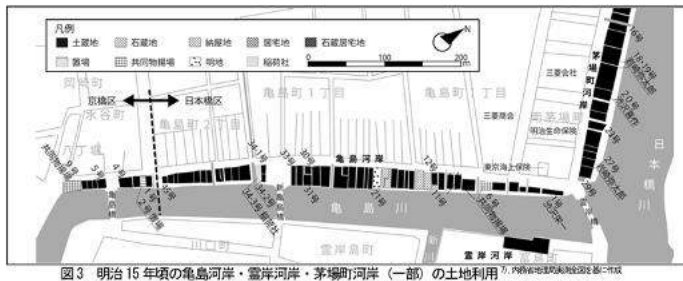


長谷川雪旦「湊稻荷神社」『江戸名所図会』



「築地八町堀日本橋南絵図」『尾張屋版江戸切絵図』1849-1862

- 1880(明治13)年 東京府統計書の河岸場の項に、
はじめて亀島河岸が記載
借地として土蔵、納屋として大小さまざまな建物が
並んだ。
- 1923(大正12)年 帝都復興事業により、河川の拡幅、橋の桁下を高く
するなど、水運の整備が行われた。
- 1924(大正13)年 監理の乱雑さなどの問題から**河岸地整理**が検討され、
河岸地の土蔵は倉庫やオフィスビルに移行した。



参謀本部陸軍部測量局『五千分一東京図測量原図』1884

1948(昭和23)年～ 戦後残土処理により新川埋め立て

1954(昭和29)年 河岸地を「維持されるもの」として東京都の基本財産に位置づけられる。

1964(昭和39)年 東京オリンピック
河岸地が普通財産に移管され、東京オリンピック後の赤字補填のために民間への売り払いが可能になった。

1967(昭和42)年 亀島河岸の地目が宅地に変更され、以降10年間で急激に民有地化が進む。

亀島川の川岸に民間の建築物が迫り、公共空間が少ないのは、この時9割の土地を民間化して河岸空間が個人の空間になっていったから。

宅地化、民有地化がされなかった茅場河岸、八丁堀河岸についてはこのような現象は起きなかった。



1948(昭和23)年、埋め立てが始まった新川(中央区立京橋図書館蔵)



国土地理院地図 1945-50 航空写真

大正8年からこの地で倉庫事業を営む住友倉庫の再開発事業

【基本情報】

所在地：東京都中央区新川2-128-1
建築主：株式会社三井住友倉庫
住友海上火災保険株式会社
設計：日建設計
施工：鹿島建設
竹中工務店
清水建設
住友建設
竣工：1988年2月25日

【建築概要】

敷地面積：22,154m²
建築面積：6,439.27m²
延床面積：128,097.13m²
構造：S造、SRC造、RC造
規模：[東館]地下3階・地上24階
[西館]地下3階・地上21階
工期：1985年10月～1988年2月



1972(昭和47)年11月 東京都中央区再開発基本構想

1982(昭和57)年2月 東京都大川端再開発構想

.....

隅田川の対岸にある佃地区に大規模な高層住宅、ホテル、カルチャーセンターを建設する事業を中核とし、新川地区を含む一帯を住宅、商業、文化施設、公園、道路などの都市機能が整った職住一体の街に計画する

1982(昭和57)年4月 大川端再開発、新川・箱崎地区関係者連絡協議会 発足 …

これに基づき、住友倉庫は同社敷地における

①道路拡幅用地の提供

②住宅建設用地の提供

③隅田川の垂直堤防

を緩傾斜堤防に改修することへの協力要請を受ける。



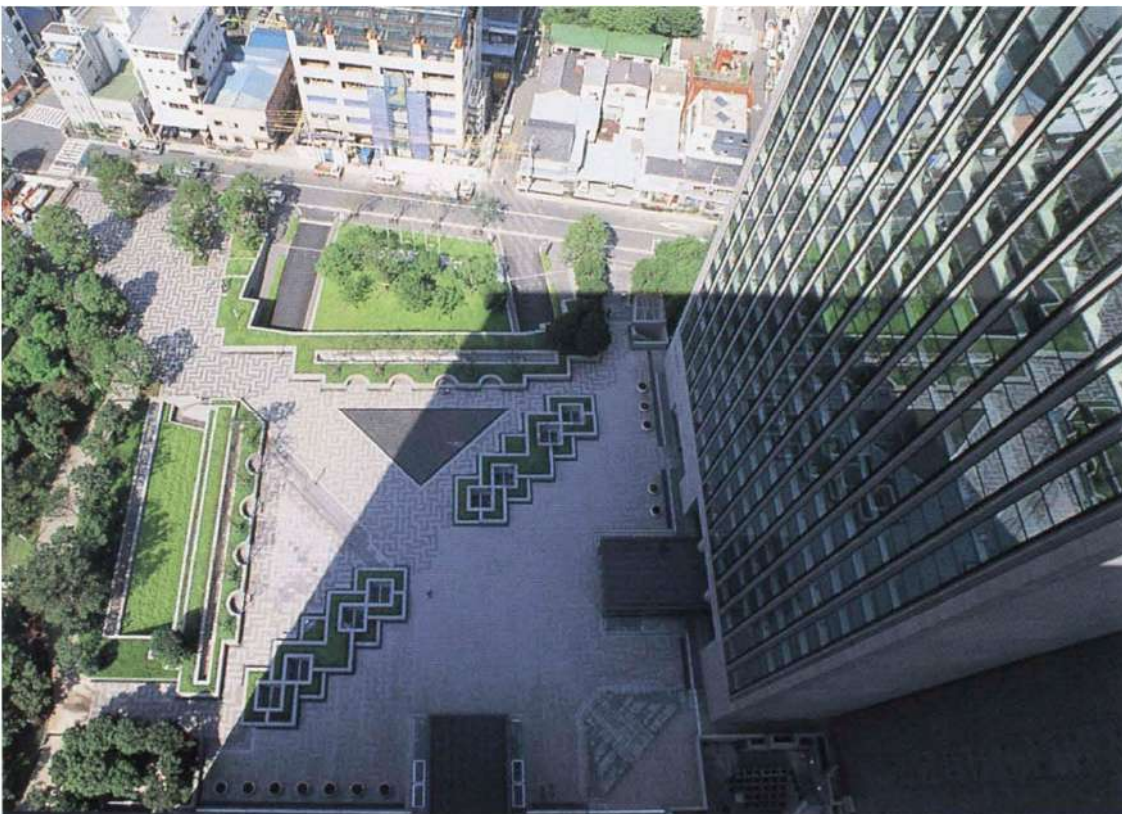
広場(プラザ)



東側全景 手前は隅田川

国鉄京葉線の新設に伴い八丁堀駅がこの近くに設けられるなど、交通条件の向上、また地域再開発との整合性などを総合的に勘案し、オフィスビルの建設を決定

- ・東西同じ高さの二棟連立形式を採用
(東館：住友倉庫、それ以外は賃貸ビル / 西館：住友海上火災保険会社本社)
- ・敷地の一部(350㎡)を道路用地に提供
- ・敷地の一部(1,250㎡)を住都公団に売却（定住人口回復のため）
- ・敷地の55%を公開空地に開放

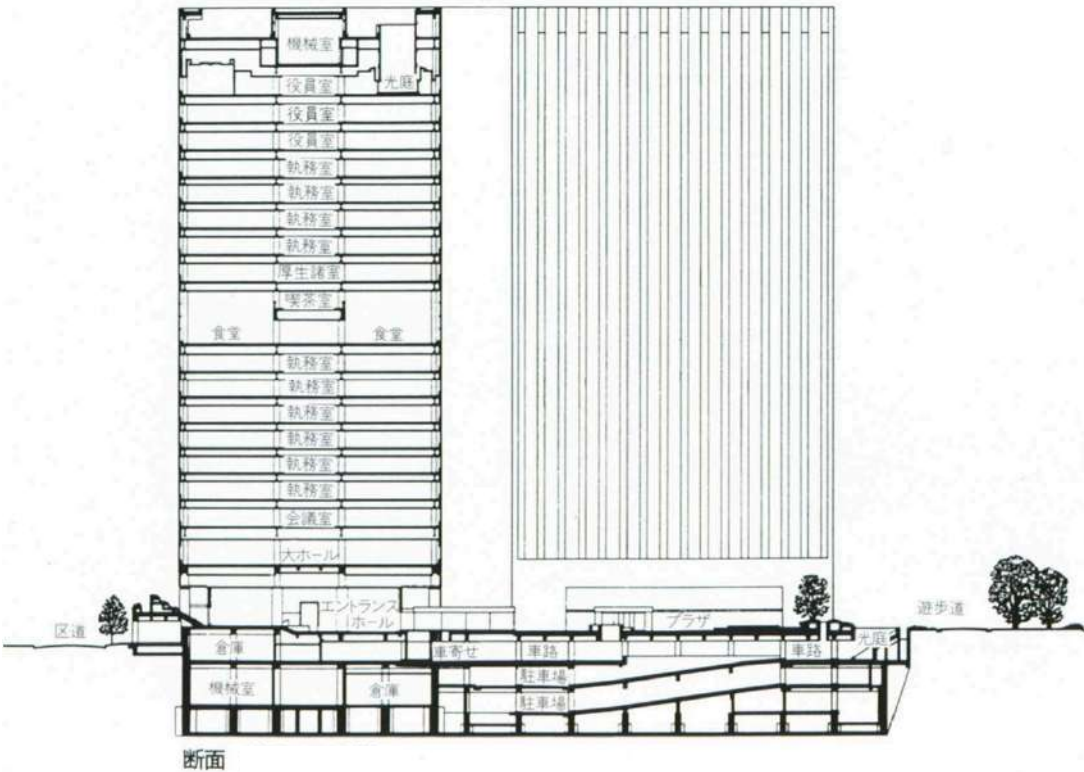


広場(プラザ)見下ろし

東京住友ツインビル 敷地平面図



引用元：『住友倉庫百年史』 p.683



平成元年BCS*賞特別賞受賞

「大川端再開発の最初の大型ビル開発事業として、地域再開発に寄与したいということが、オーナー、クライアント、設計者の間に共通なテーマとして、きわめて望ましい状態で醸成されて計画が進められた」
(近江栄氏選評)

*The Building Contractor's Societyの略

大正8年からこの地で倉庫事業を営む住友倉庫の再開発事業

【基本情報】

所在地：東京都中央区新川2-128-1
建築主：株式会社三井住友倉庫
住友海上火災保険株式会社
設計：日建設計
施工：鹿島建設
竹中工務店
清水建設
住友建設
竣工：1988年2月25日

【建築概要】

敷地面積：22,154m²
建築面積：6,439.27m²
延床面積：128,097.13m²
構造：S造、SRC造、RC造
規模：[東館]地下3階・地上24階
[西館]地下3階・地上21階
工期：1985年10月～1988年2月



日比谷神社

- (創建年不詳) 江戸城築城に際し、日比谷御門造営のため芝口に敷地を移動。
- 1606(慶長11)年 この時、海に祀らなければならない崇敬者は日比谷稲荷大神を戴いて八丁堀先の干潟に埋築して社殿を造営した
- 1923(大正12)年 関東大震災
- 1928(昭和3)年 都市計画区割整理の対象となり、愛宕下町2丁目に換地され、新橋四丁目に日比谷神社の社殿造営
- 2009(平成21)年 都市計画道路計画(環状2号線)の建設により、ご社殿を東新橋二丁目に建造



日比谷稲荷神社(神社人より)
左の倉庫の「八二東町会倉庫」とは、この地の八丁堀二丁目東町会の町会倉庫である。



日比谷神社公式サイトより
『東京名所図絵』



日比谷神社が現在の日比谷公園にあった頃から旅人守護に靈驗が篤かったので、江戸に来た人々の多くが当神社に泊まってお詣りをしたので、『旅泊稲荷(さばいなり)』と呼ばれていた。

新橋に移った頃、『鯖稲荷』と変わり、虫歯虫封じに苦しむ人が鯖を食べることを断ち祈誓をかけると治ったという逸話もある。治った人々は日比谷神社に鯖を奉納する。

舟運や河岸地利用が減った戦後ごろから、衛生面などから水辺への意識が薄れていった？

オリンピック開催時の船上生活者規制
急激な工業化による水質汚染

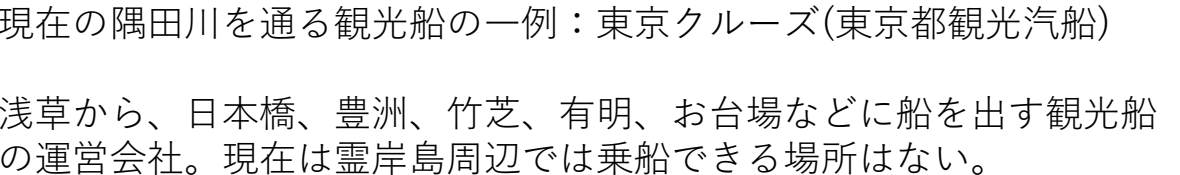
2023(令和5)年10月 日本橋ー豊洲間 開設
2024(令和6)年5月 晴海ー日の出棧橋間 開設

- メリット
- ・ 防災船着き場と水上航路の維持が可能→災害時にすぐ機能する

- 問題点
- ・ 便数が少ない（1日4往復、隔日運航）
 - ・ 料金が安い（片道500円）
 - ・ 冬場の利用客が少ない



画像出典：<https://diamond.jp/articles/-/351460>



至 日本橋

至 浅草

- ①公開空地と水辺の連続性
- ②日比谷稲荷神社の再生
- ③八丁堀の再生
- ④水上航路の整備

日比谷稲荷神社の聖域としての再解釈と、船着き場の整備

水上航路を整備し、船での通勤など、日常的な水上交通の発展を促す

至 京橋

八丁堀を宝町まで掘り起こし、日比谷神社まで神輿ルートを確保

- ・隅田川から水路を引き込み、常時利用できる船着き場に。
- ・野外音楽堂、老人ホーム、コミュニティホールを設け、様々なアクティビティの創出を図る
- ・ウォーターフロントには遊歩道を整備し、日中はキッチンカーを展開

至 月島・竹芝





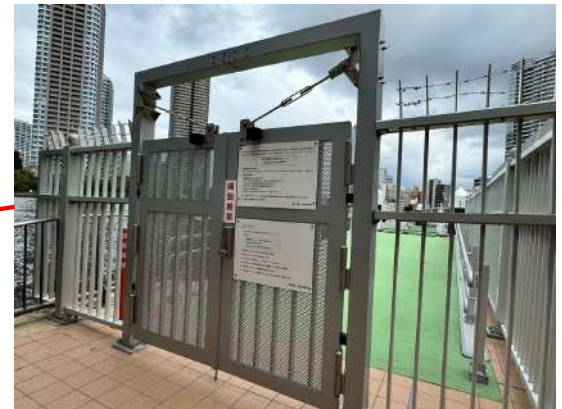
亀島川と旧新川の分岐点



東京住友ツインビルディング



亀島川水門付近



使われていない防災船着き場

現状の問題点

- ・中高層ビルの足元に広がる公開空地が、有効的な使われ方をしていない。
ただ広い空間があるだけで、誰もいない。

→人を滞留させる仕掛けを作る必要。

水辺の開放的な空間と合わせて再生すれば、豊かなコモンスペースを創出できる

提案の方向性

水辺の空地进行親水空間化する（ハード）
 +
 何らかのアクティビティを生じさせる（ソフト）
 ↓
 人が常に滞留し、緑と水と親しめる空間に。

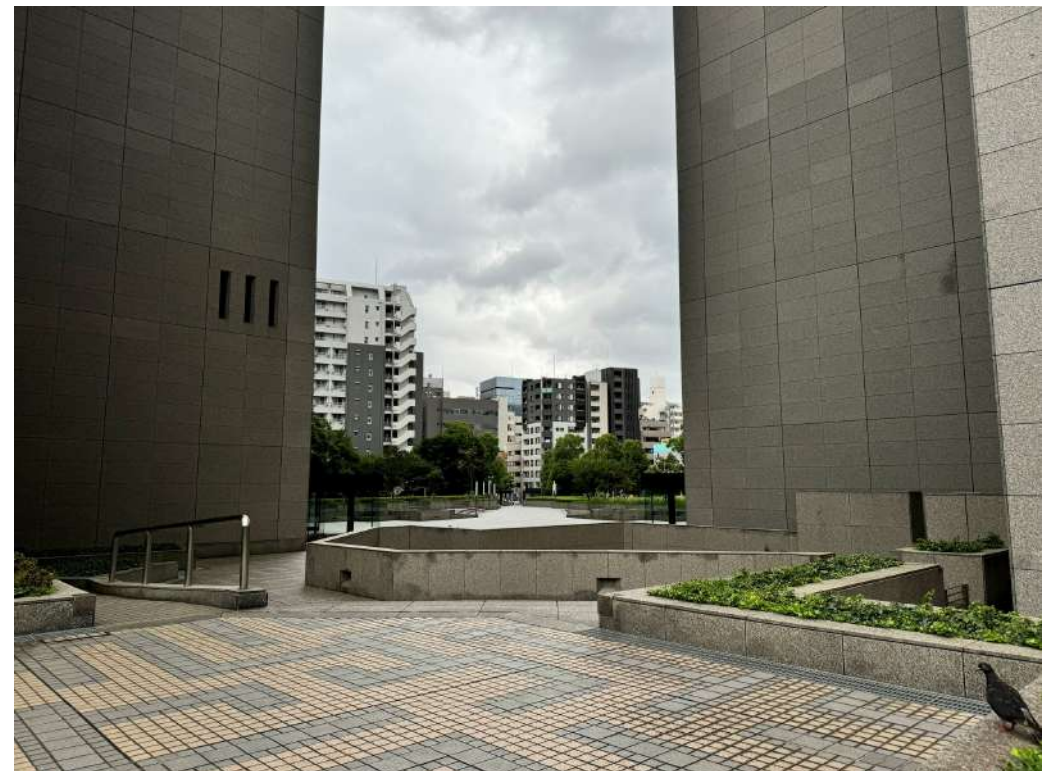
ハード面の整備

← ・船着き場の整備、遊歩道の整備、水上交通の再生

← ・飲食
 ・文化的生活
 ・集会
 ・高齢者との交流

← ・レストラン / カフェ
 ・野外劇場
 ・コミュニティホール
 ・老人ホーム

ソフト面の整備



ハンターズ・ポイント・サウス・ウォーターフロント公園 (2018)

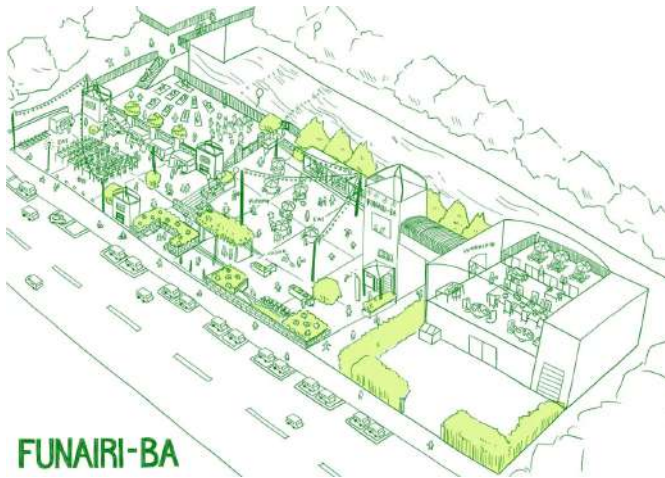
沿岸部に約6000m²の湿地帯を新設し、堤防の浸食を防ぐ。持続的な水質の改善や生態系の回復にも役立っている。人工の半島は、満潮時は陸地から切り離される。水害対策の擁壁は、高台プロムナードの階段式テラスとしても機能する。天然芝とコンクリートの段差で洪水から街をまもる。カフェ、プレイグラウンド、ドッグパーク、アウトドアジムなど公園に付随する機能も充実している。



<https://www.weissmanfredi.com/projects/15-hunter-s-point-south-waterfront-park>

目黒川舟入場の再生（2023）

目黒川の舟入場(1937)を、地域コミュニティや文化情報発信拠点、中目黒のランドマークとして蘇らせる。



川の資料館
→コワーキング施設としてリニューアル

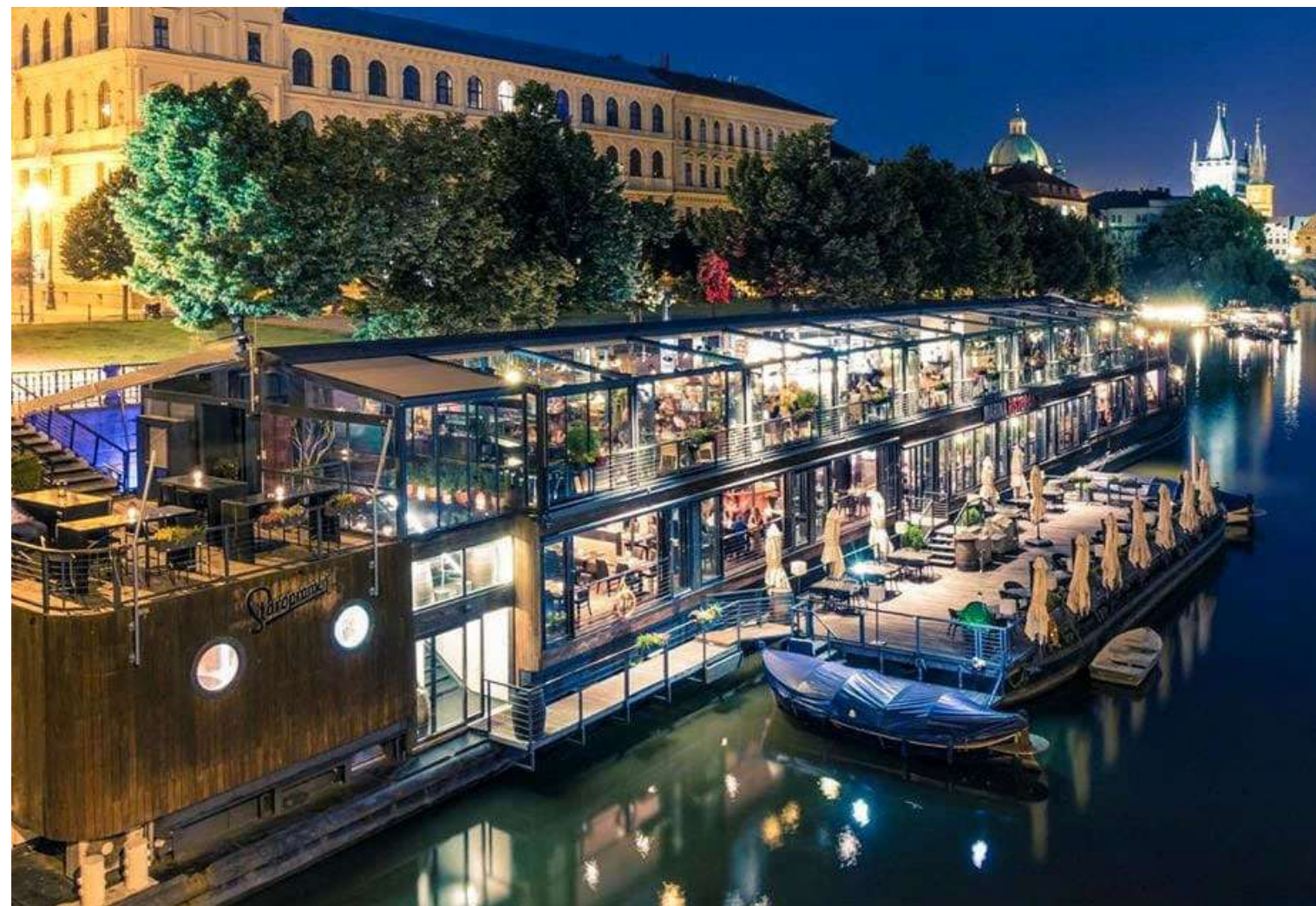


キッチンカーの出店やフリーマーケットの開催



コワーキング施設にはテラスもあり、川の景色を楽しめる

船上レストラン （プラハ）



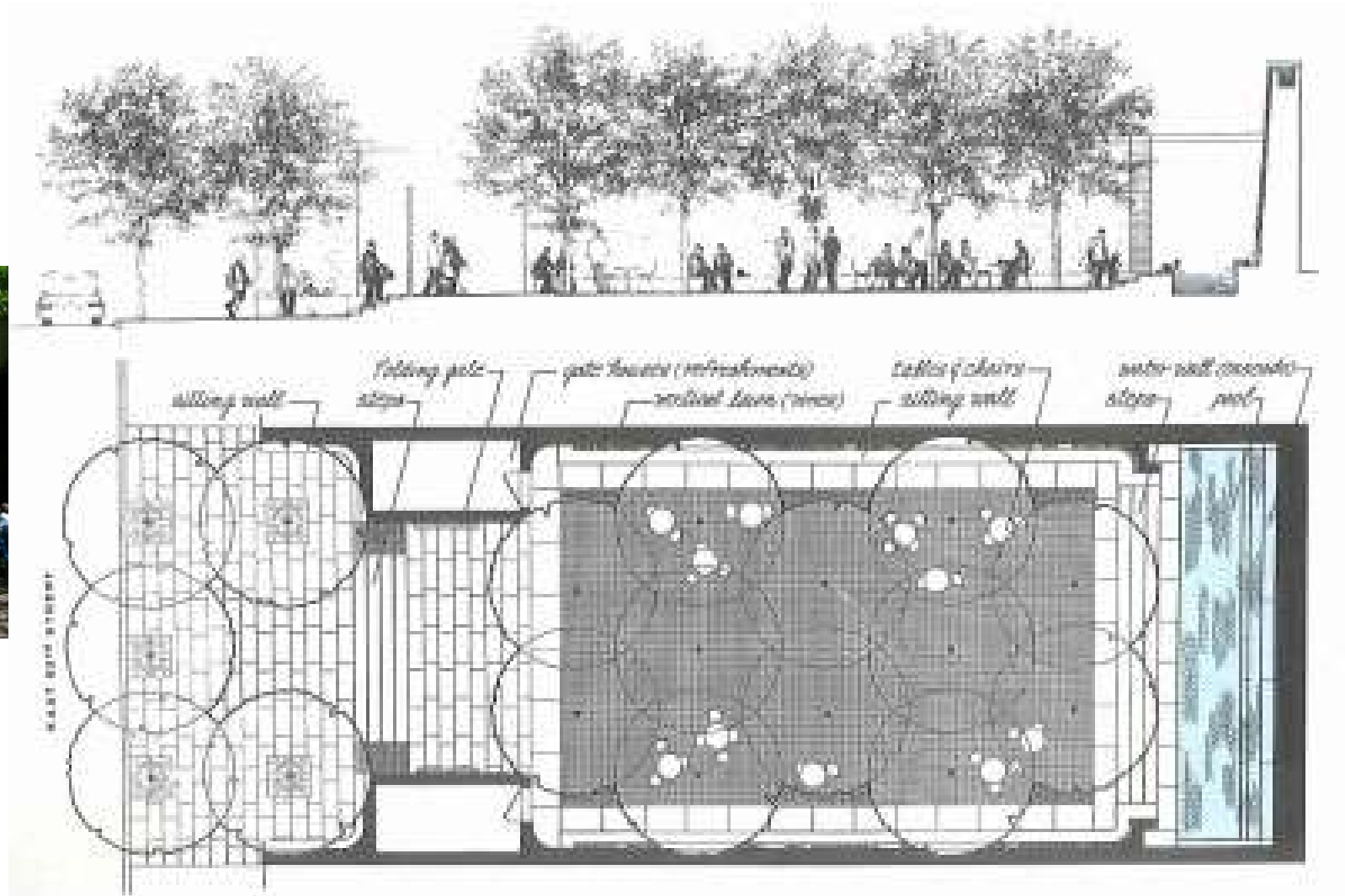
プラハのヴルタヴァ河岸にある船上レストラン
対岸にプラハ城が望める絶好のビュースポット

<https://www.marinaristorante.cz/en/location>



ペイリー・パーク（ニューヨーク）

光、音、風（自然の要素）がやすらぎを与え、
水の音は適度にひとの声や物音を和らげる効果もある。



<https://oitamiraijuku.jugem.jp/?eid=486>

水辺の整備

- ・水辺には遊歩道を整備
- ・キッチンカーを展開し、川沿いにも人を呼び込むことで、公開空地と水辺空間の連続性を創出する

水遊び場

- ・ビルの壁沿いに小さな人工滝を設ける
- ・浅く水を張り、子供が水遊びをできる場所をつくる

船着き場

- ・広場を掘り込み、小型船が発着出来る船着き場を整備する
- ・水上交通を日常的に利用できる環境をつくることで、災害時の避難や物資の運搬などに役立つ

コミュニティホール

- ・各種イベントを開催し、高齢者と若者の交流を図る
- ・平屋建として圧迫感を低減するとともに、常に外の緑と水を感じられる開放性をもたせる

老人ホーム

- ・常に人が居る環境づくり
- ・高齢化社会に対応

野外音楽堂・野外劇場

- ・水辺の開放的な雰囲気ので、音楽や映画の鑑賞ができる。
- ・若者を呼び込むことを期待する

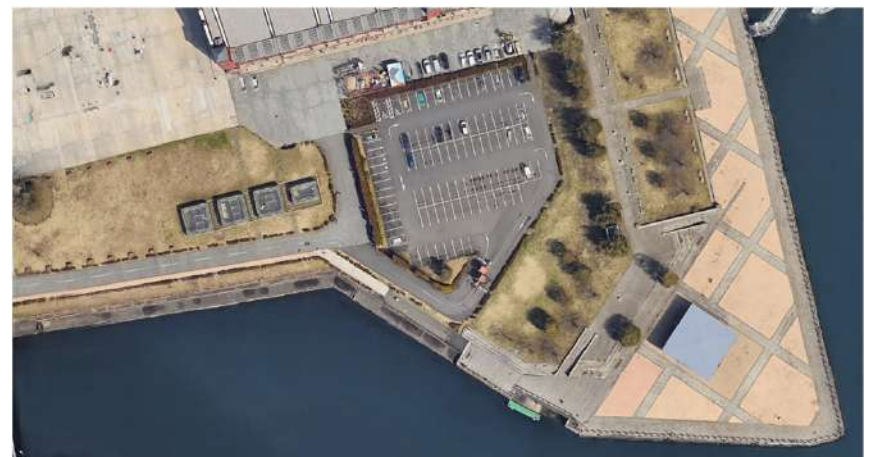


公開空地再計画配置図 1:500

赤レンガパーク・水のオブジェ（2000）

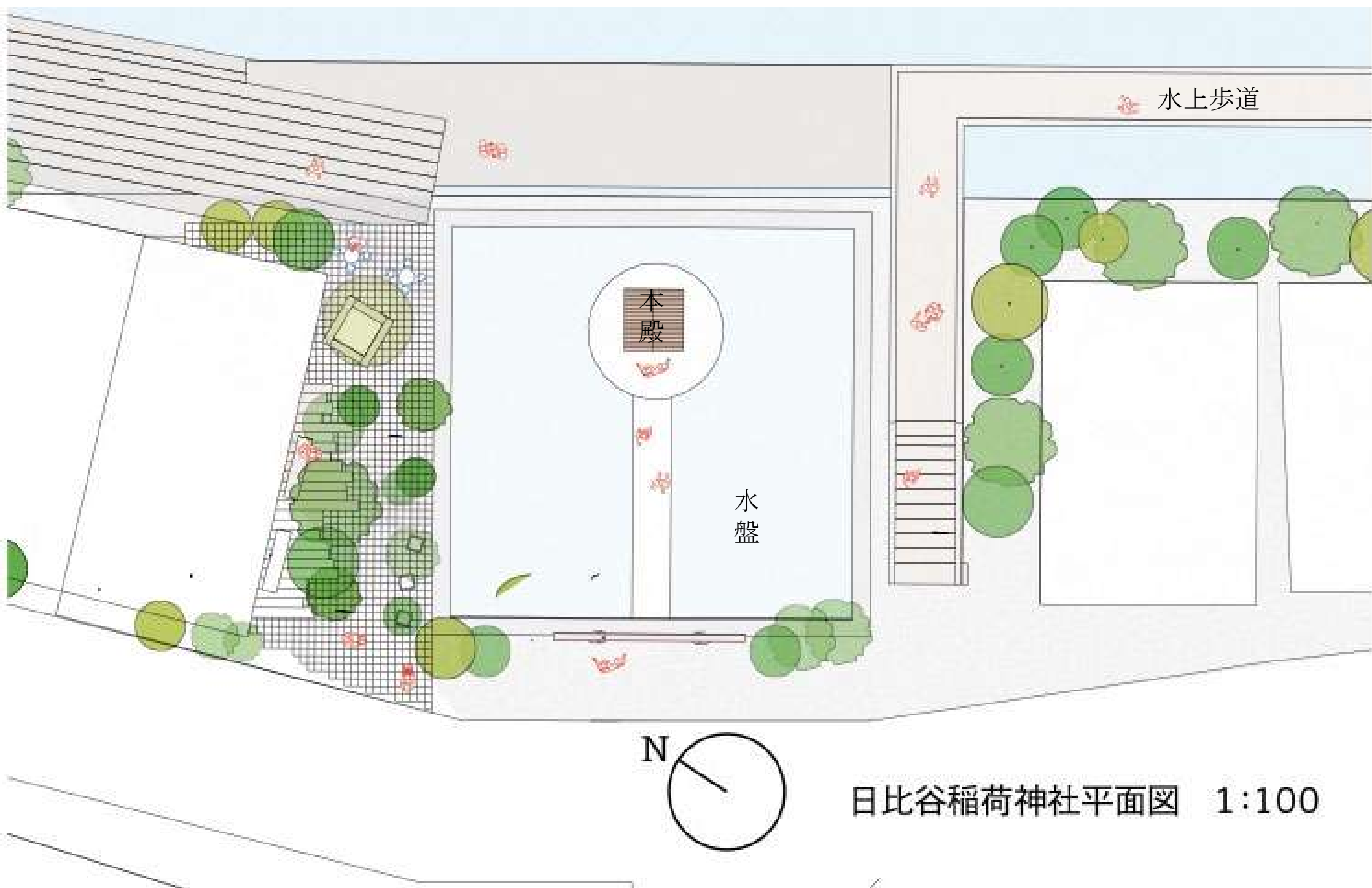


奥にある水辺を、水盤で見立てで引き込み、それを進んでいくと本当のウォーターフロントが現れる。
実際の水辺空間ではないが、水の音、水の景色を感じることができる。



日比谷神社の現状





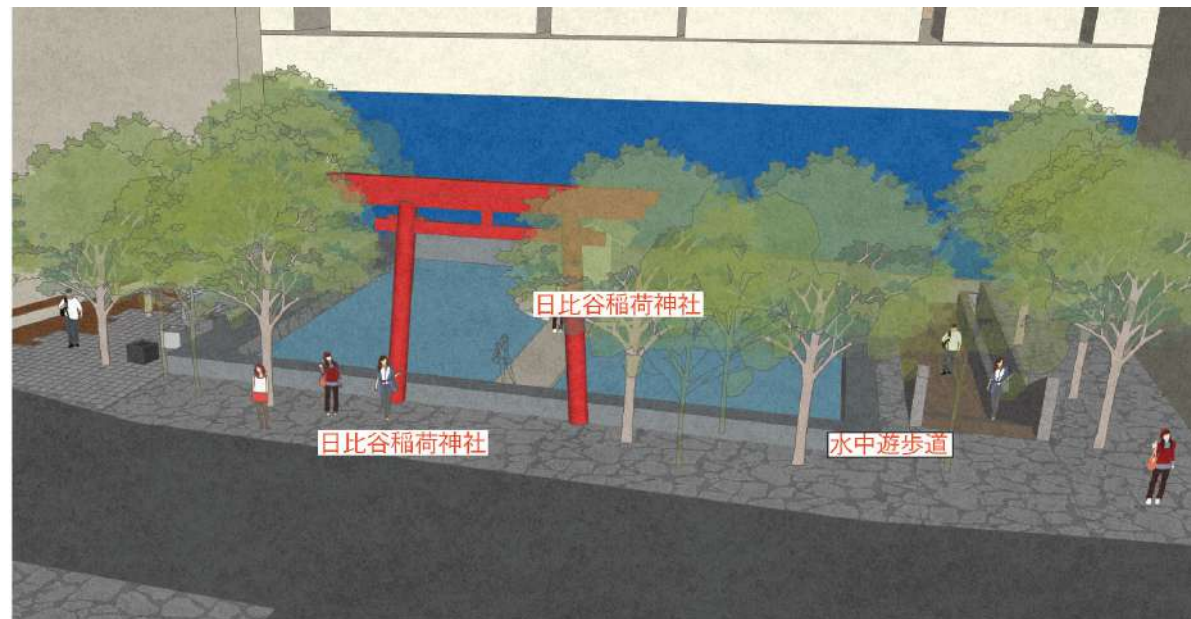
設計パース

神社の社自体の大きさはそのままに、水盤を配置することで日比谷から移された際に水辺に分けて建造された由緒を表現できると考えた。

水辺空間を眺めるだけでなく、神社の北側は船着き場、船待ち広場として整備する。
感じるだけでなく、“使う”河川空間にする。

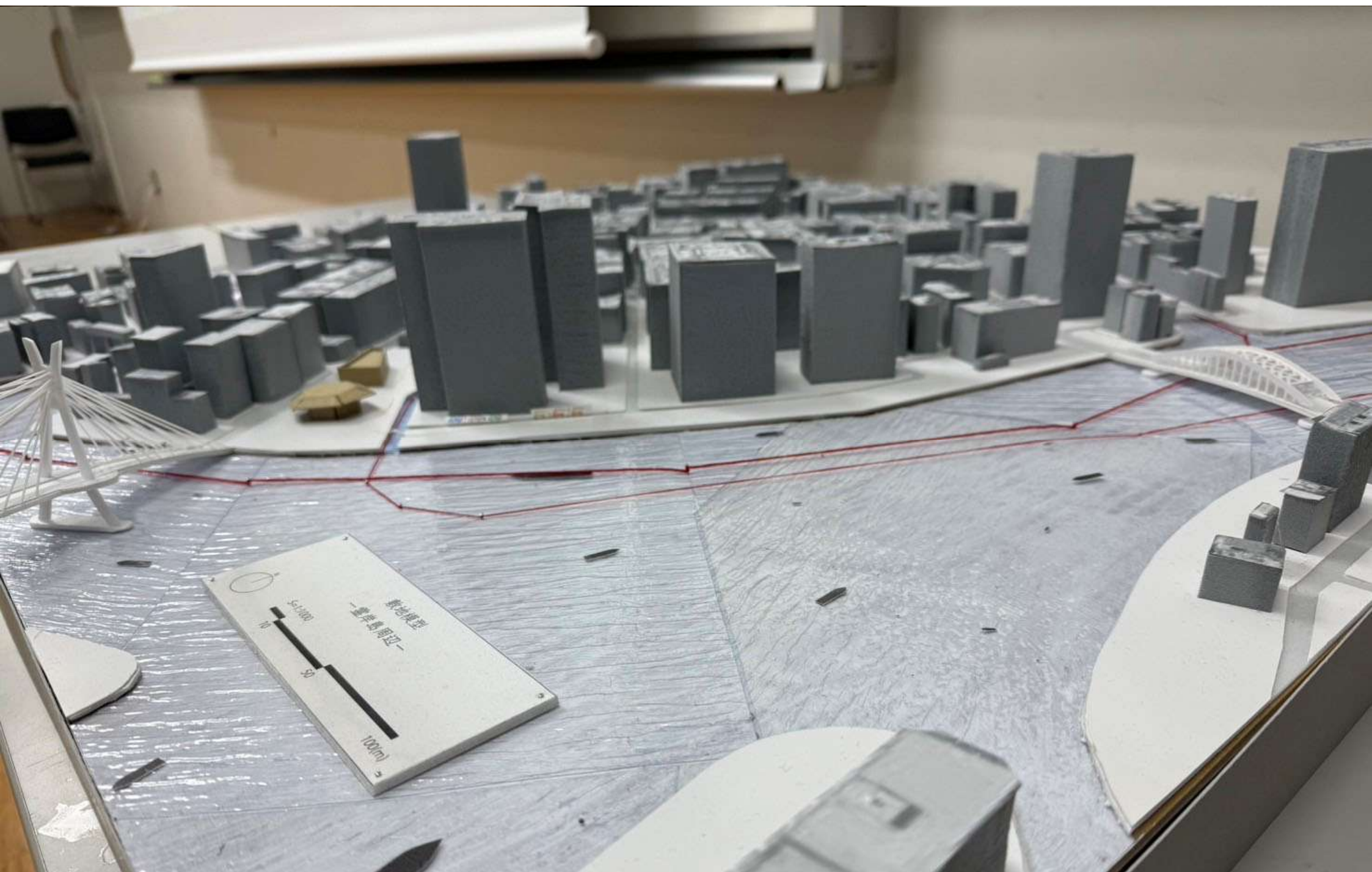


船着き場のパース。単に心地いい空間ではなく、亀島川を取り巻く隅田川舟運の拠点の一つを作ろうと考えた。



日比谷神社立面パース。社を水盤で取り囲み、水辺空間を川岸より約15m引き込む。

再生計画の全体像：1/1000スケール 霊岸島全体模型





再生計画の全体像：1/1000スケール 霊岸島全体模型



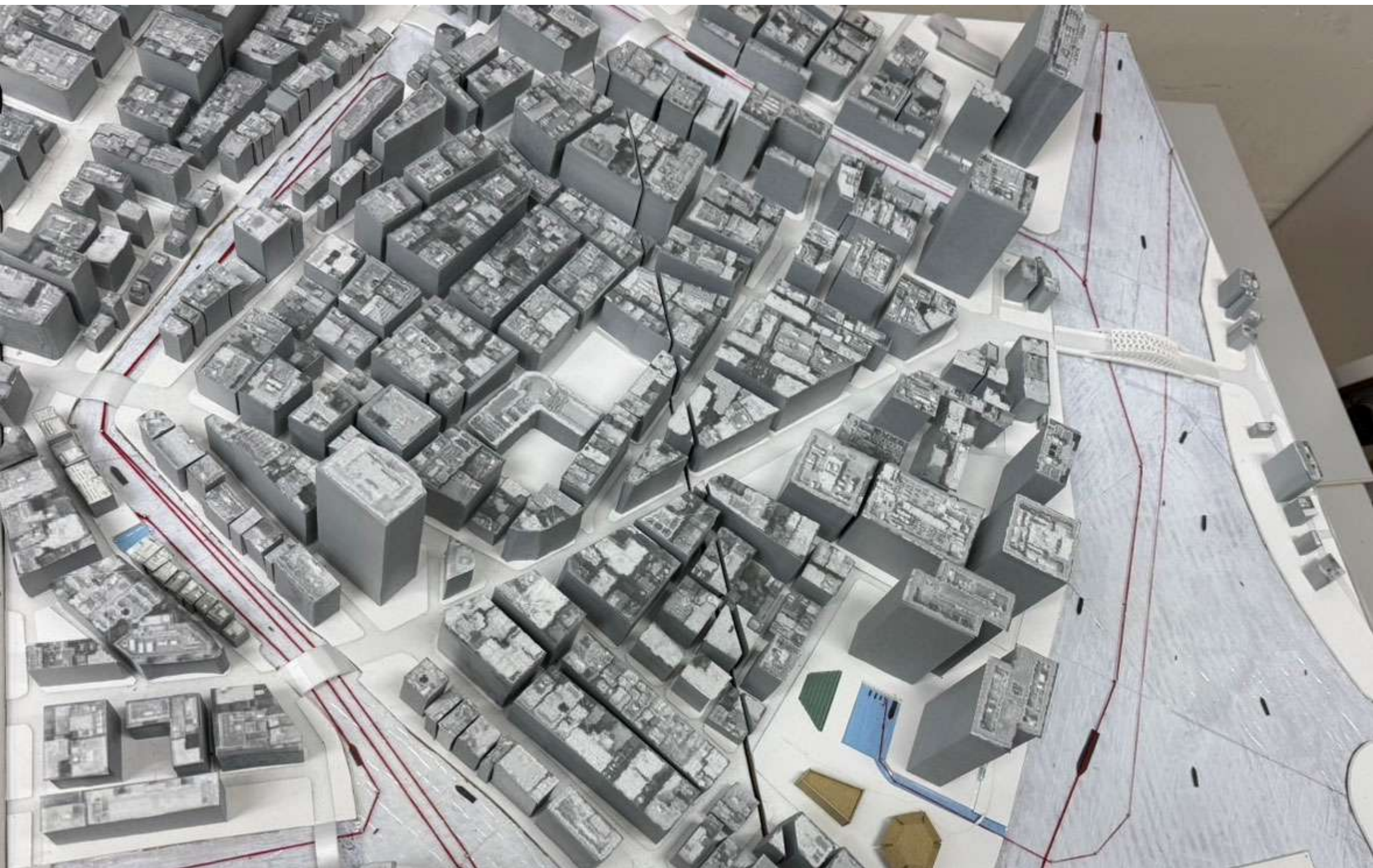
再生計画の全体像：1/1000スケール 霊岸島全体模型



再生計画の全体像：1/1000スケール 霊岸島全体模型



再生計画の全体像：1/1000スケール 霊岸島全体模型

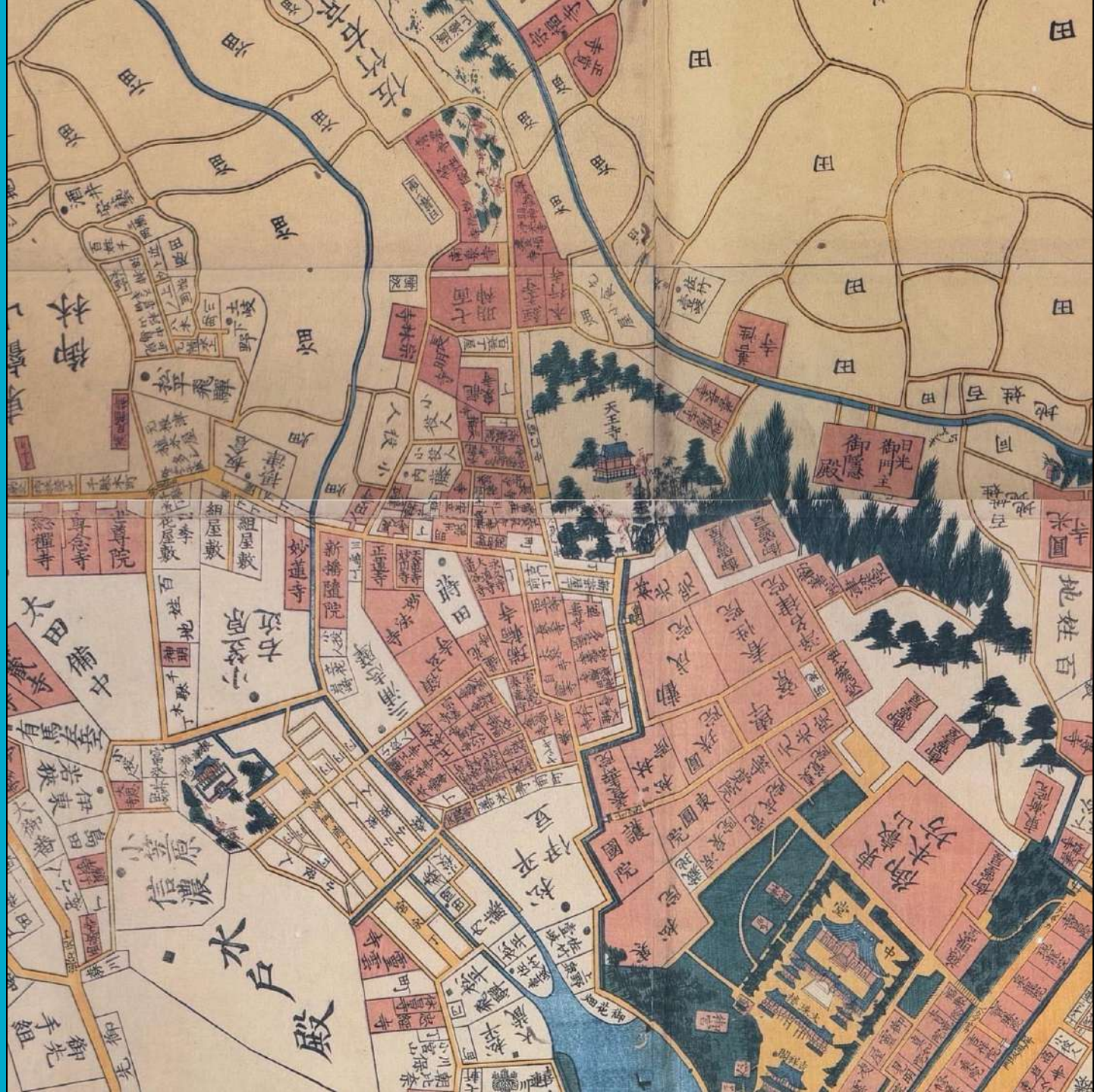


谷中・藍染川

再生プロジェクト

24U1111 奥田朝子

23U1304 唐婧雯



目次

01 対象敷地

02 歴史研究

03 現在の谷中

04 課題

05 参考事例

06 設計提案



（元）藍染川と その周辺

(元) 藍染川



よみせ通り
へび道

[illegible]

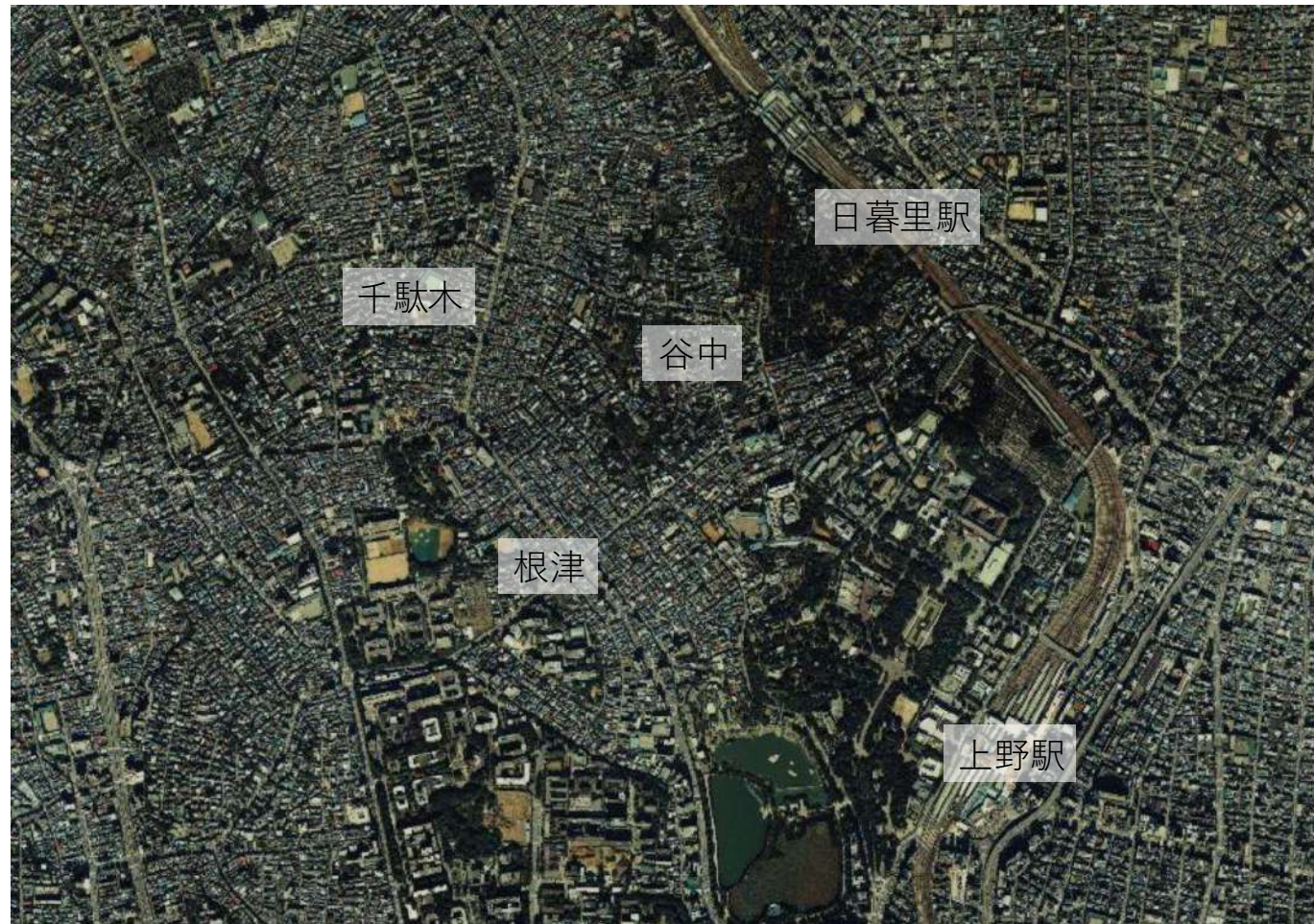
藍染通り

01 対象敷地

谷中の地理

谷中は周辺を日暮里、上野、千駄木、根津に囲まれた谷地に位置している。（右図）

現代の航空写真



01 対象敷地

谷中の地理

原始、谷中の低地は東京湾の入江で、上野や本郷の台地は半島であった。

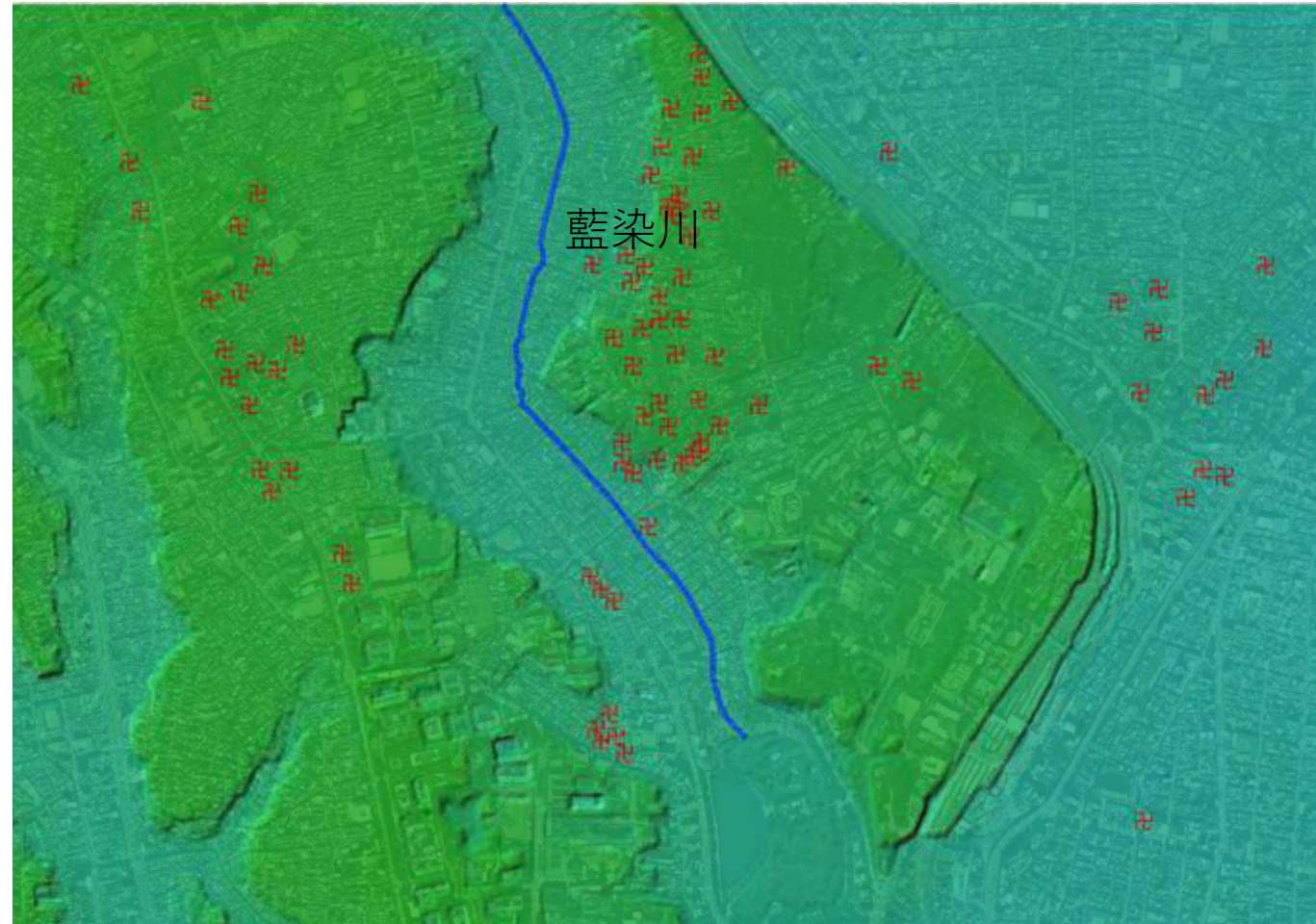
→海水が後退し、一筋の流れとして残った川が藍染川となった



01 対象敷地

谷中の地理

台地上に多くの寺が分布している。
江戸時代に他所から多くの寺が移転してきた。
それ以前は山林地で、百姓家が点在する農村だった。



02 歴史研究 谷中の歴史：江戸時代

1274(文永11)年 長耀山感応寺 開山
(→1833(天保3)年、護国山天王寺へ改称)

1616(元和2)年 加賀藩前田家が下屋敷を拝領
→1683(天和3)年、上屋敷に変更

1622(元和8)年 水戸徳川家の下屋敷が置かれる
→1693(元禄6)年、中屋敷に変更

1625(寛永2)年 上野に寛永寺創建→谷中に子院が次々に建てられる
山号は、比叡山に倣って「東叡山」とする

1633(寛永10)年 松平伊豆守が下屋敷を拝領
美作勝山藩三浦家が下屋敷を拝領

1657(明暦3)年 明暦の大火により焼失した寺院が多数移転



初代歌川広重『東都名所 上野東叡山全図』



『小石川本郷根津谷中辺場末絵図：寛保延享ノ頃』（国立国会図書館所蔵）

02 歴史研究 根津の歴史：江戸時代

1652(承応1)年 甲府藩主徳川綱重の下屋敷が設けられる
(現・根津神社のあたり)

1706(宝永3)年 **根津権現**が甲府徳川家の藩邸跡に造営される
(千駄木より移転)
∴根津権現は綱重の子・綱豊の産土神
→この地を「根津」と称するようになる

門前地に**根津門前町(門前町屋) + 根津宮永町(拝領町屋敷*)**が起立

↓
社殿の造営に携わる大工や左官職人を相手とする煮売茶屋や遊女屋が置かれる。 →江戸有数の岡場所へ発展。

* 拝領町屋敷：下級幕臣に与えられた拝領屋敷内に長屋を建て、町方の者を居住させ、賃貸料を取ることを認められたもの

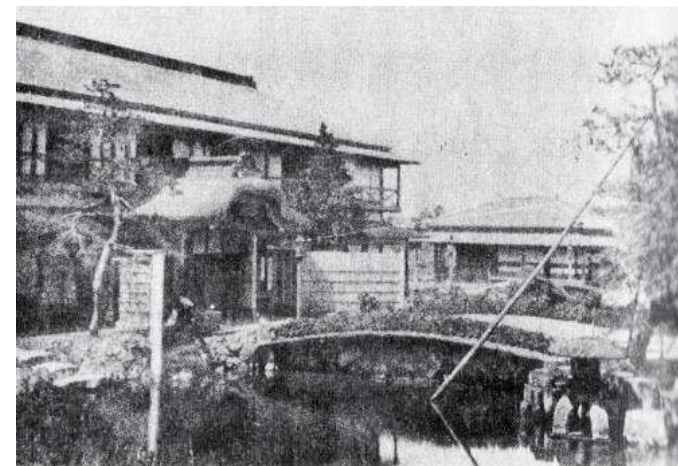
1842(天保13)年 天保改革で遊郭の営業禁止 (実際は継続)

1868(慶応4)年 幕府の許可を得て再開

1888(明治21)年 根津遊廓 廃止
∴東大が明治9年に加賀藩邸跡へ移転
→東大生が入り浸るようになり、風紀上問題視された

<文学における根津遊廓>

- ・坪内逍遙は、「大八幡楼」の遊女を見初めて結婚
- ・森鴎外『ヰタ・セクスアリス』『雁』



「根津遊廓の夜景」『花柳事情 巻之上』 大八幡楼(森まゆみ『不思議の町 根津』ちくま文庫)

藍染川と谷中の風景

上流部：畑に囲まれた長閑な風景

下流部：寺や町屋が並ぶ

藍染川の上流・中流部の周辺は、江戸時代にはまだ畑が広がる田園地帯で、所々寺院が点在しているのみだった。

右の図は、江戸名所図会の一部で、左が感應寺、右が宗林寺の境内を描いたものである。

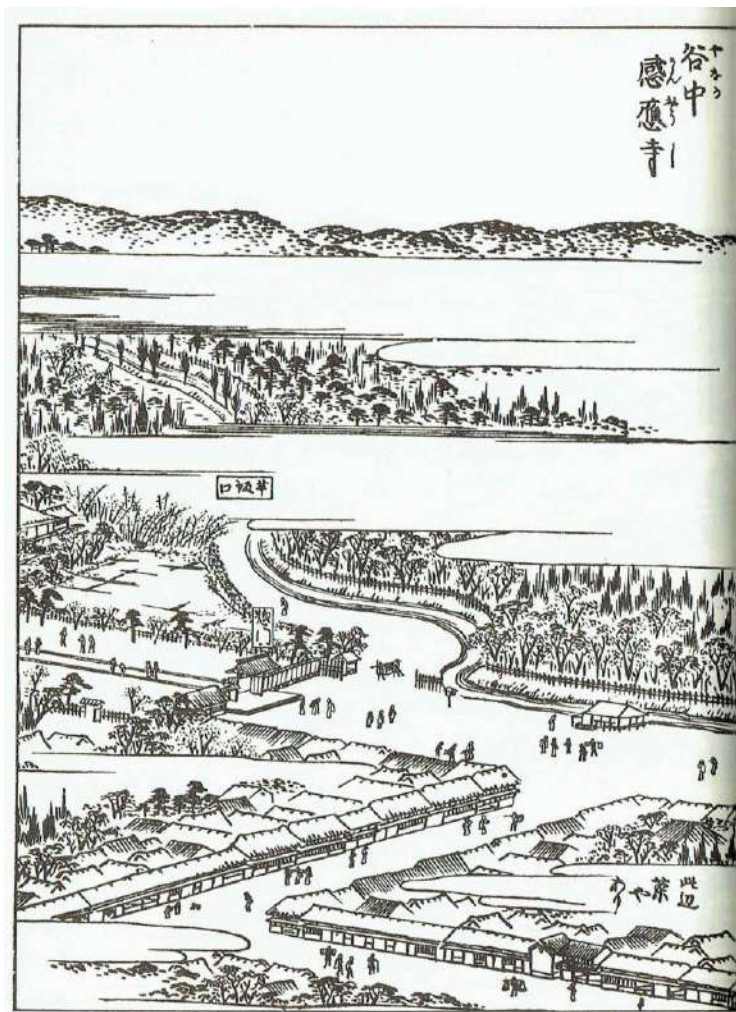
宗林寺の境内の絵には、芭蕉の句が添えられ、この辺一帯を「螢沢」と呼ぶほど蛍が飛び交っていたことが記述されている。

「螢澤」

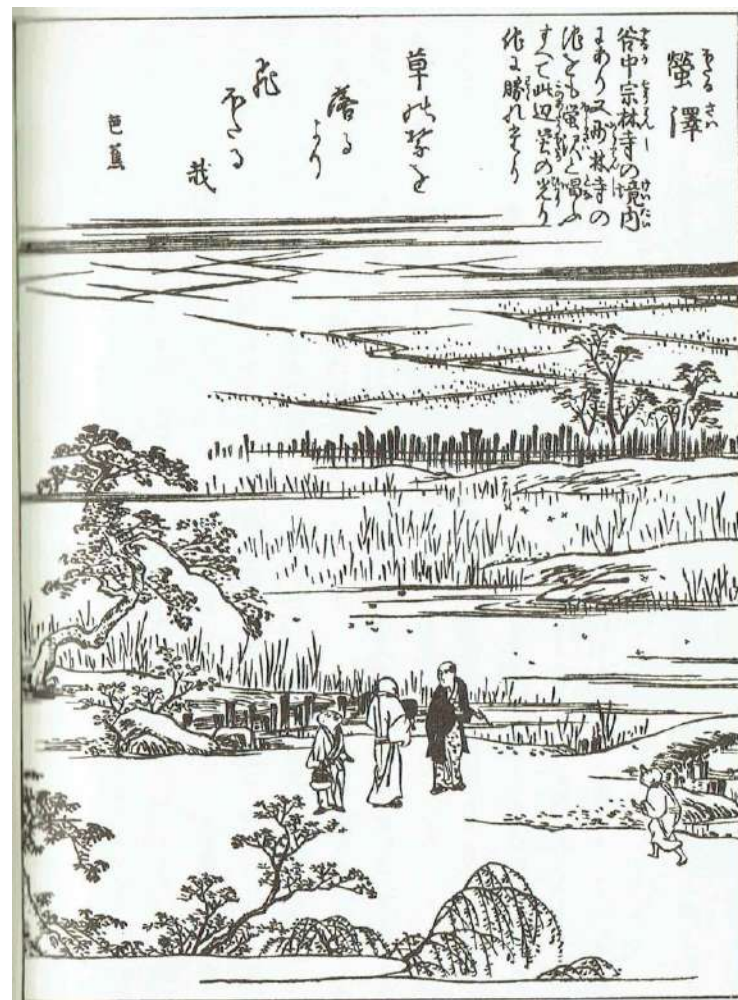
谷中宗林寺の境内にあり、また妙林寺の池をも螢沢と唱ふすべて此辺螢の光り他に勝れたり。

草の葉を落るより飛ほたる哉

芭蕉



『江戸名所図会』より「谷中感應寺」



『江戸名所図会』より「螢澤」

藍染川と谷中の風景

また、団子坂の上には、花屋敷と呼ばれる遊興施設があった。そこでは、四季の花々、料理、眺望、露天風呂などを楽しめた。

花屋敷の中心的な施設である、「紫泉亭」からは、谷中や上野、遠く神田まで見渡せたと
言う。

下の図は広重の『絵本江戸土産』のワンシーンである。ここには、下を流れる藍染川周辺の風景が紫泉亭と共に描かれている。



1859(安政6)年

宗林寺

花屋敷



広重「千駄木団子坂花屋舗」『絵本江戸土産』第七編
(1857年頃、国会図書館蔵)

『分間江戸大絵図 完』 1859(安政6)年

1868(明治元(慶応4))年 上野戦争

彰義隊が上野の山に立てこもり、官軍と戦火を交える、上野戦争が起こり、多くの寺院が焼失した。

明治6年、その跡地に東京で初めての公園である上野公園が開園した。

上野戦争は江戸の終焉を告げる象徴的な出来事であった。



歌川芳盛「本能寺合戦之図」*実際は上野寛永寺の戦闘の様子



惺々暁斎『東京名所之内 上野山内一覽之図』1877(明治10)年



内務省地理局『東京実測全図』1886-88(明治19-21)年

明治時代の藍染川の様子



明治時代の藍染川の様子



1908(明治41)年 夏目漱石の『三四郎』で藍染川
がきれいな川として描写される。

“谷中と千駄木が谷で出会うと、いちばん低い所に小川が
流れている”

“三四郎は水の中をながめていた。水が次第に濁ってくる。
見ると川上で百姓が大根を洗っていた”



1911(明治44)年 森鷗外の『雁』ではドブ川として
描写される。

“寂しい無縁坂を降りて、藍染川のお歯黒のような水の流
れ込む不忍の池の北側を廻って、上野の山をぶらつく”

【川を利用した仕事】*小瀬健資氏調べ

- ・澁返紙店（明治1）
- ・太田屋扇子製作所（明治1）
- ・植田紅絹朱染工場（明治3）
- ・金魚屋バンズイ（明治8）
- ・瀬戸油シート店（明治16）
- ・岩橋リボン製織所（明治27）
→日本で最初の動力織機によるリボン生産
- ・丁子屋染物店（明治33）
- ・山崎染工場（明治34）
- ・根津製館所（明治43）

雨が降るとバンズイって金魚屋から金魚がいっぱい流れ出して子供たちは大喜び。しゃくって遊んだもんです。不忍池の方から鯉や鮒が上ってくることもあった。（槍新さん、藍染町）

私は団子坂の上の方で生まれましたけどネ、お盆のとき、おひょうさま（お精霊様）といって果物とか野菜とか藍染川に流しましたネ。それでずうっと川沿いにどこまでもどこまでも見えなくなるまで追いかけてました。（中小路静いさん、明44生）

この辺りの染物といえば初音四丁目三八番地にあったリボン工場（岩崎営業所、今の旭プロセス製版）、五八番地に山崎染工場（明治34設立）があって、よく色水を川に流してたのは覚えてますね。色水を流さない日は川底の見える澄んだ水で、メダカや川エビを採りました。（佐藤龍蔵さん、明36生、富永町）

—『谷根千』3号、1985.3より引用—



02 歴史研究 谷中の歴史：大正時代

1921(大正10)年
昭和初期

藍染川の暗渠化工事が開始
全て暗渠化が完了する



藍染川中流部（現在の谷中銀座商店街との交差部分）
に幅8mの道路を整備



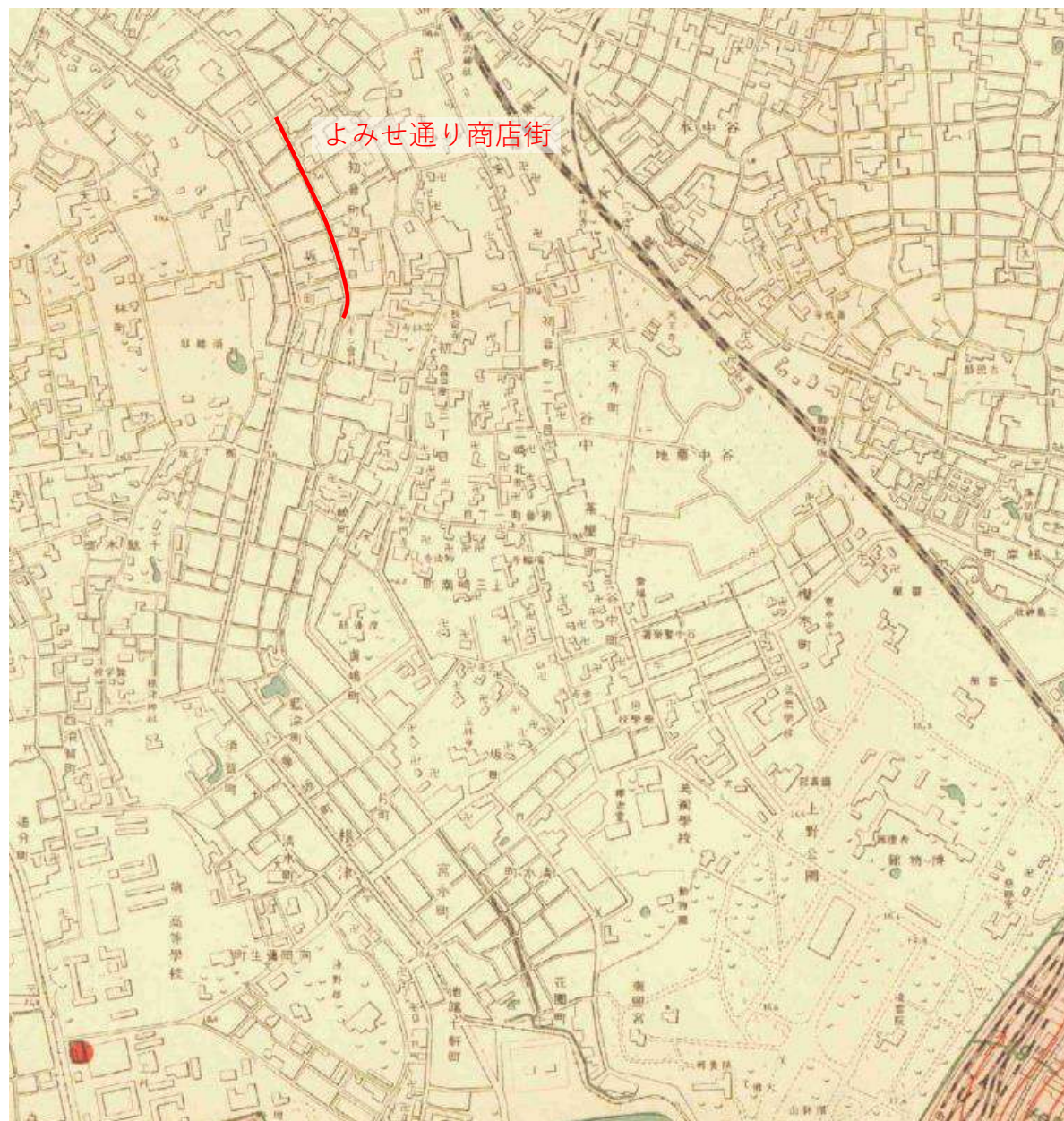
よみせ通り商店街

商店街には朝市が立ち、午後になると露店が軒を並べ、
夜は大道芸人も芸を競うような賑やかな商店街へ成長。

夜更けまで賑やかさが続いたことから「夜店通り」と
呼ばれるようになった。



現在のよみせ通り商店街



文部省震災豫防調査會『東京市火災動態地図 大正十二年九月大震災』1923

02 過去の谷中

谷中の歴史

谷中の歴史を辿ると江戸時代にはまだ上流部は畑に囲まれ、明治に入るまで染め物の産業が行われていた記録はない。藍染という語源は染め物以外から来ている説もある。しかし藍染川は当時そこに住む人々に日常的に利用され身近な存在だったと言える。

1657(明暦3)年	明暦の大火により焼失した寺院が多数移転
1859(安政6)年	藍染川の上流部は畑に囲まれた長閑な風景、 下流部には寺や町屋が並ぶ
1868(慶応4)年	上野戦争で彰義隊が敗れ、多くの寺院が焼失
1911(明治44)年	森鷗外の『雁』ではドブ川と藍染川が描写される が夏目漱石の『三四郎』では綺麗な川として描写 されていた
1894(明治27)年	藍染川の川辺に岩橋リボン製織所ができる
1921(大正10)年	藍染川の暗渠化工事が開始される
昭和初期	全て暗渠化が完了する
現在	よみせ通り商店街ができる

よみせ通り

よみせ通り



04 課題

水辺の復旧

現地調査と文献調査から分かった対象地の問題点を抜き出し、その課題を解決するとともに、水辺を復旧できる提案を考える。

2 都市の隙間

1 防災

- ・ 建築密集
- ・ 住宅地の老朽化
- ・ 水はけ

3 交通

- ・ 道幅
- ・ 交通量

1 防災

- ・ 建築密集
- ・ 住宅地の老朽化
- ・ 水はけ

- ・ 建築密集：空襲の影響を受けなかったため築100年の木造建築が多数残っているが、その分狭い道が多い。そのため地震・火災が起こった際に避難経路の確保や火災の延焼の防止がしにくい。
- ・ 住宅地の老朽化：地震時に盛り土の崩落や液状化の危険性がある。
- ・ 水はけ：藍染川は元々水はけが悪く、氾濫を繰り返していた。そのため大正10年(1921)から暗渠化された。

→再生した水辺空間を火災の延焼防止にも利用できる
ようにする。
暗渠のパイプはそのままに表面に水辺空間を再建する。

2 都市の隙間

広場がほとんどなく都市の隙間がない。
地域住民や訪れる観光客の量に対して佇める場所が少ない。
地元の人々と観光客をつなぐ場所があってもいいのではないか。

- 歩行者天国のような水場の再建を考える。
よみせ通りの先にあるへび道も大きな水場を作ること
は難しいが小さい設計で住民が水辺を感じられる空間
を作ることができないか

3 交通

- ・ 道路
- ・ 交通量

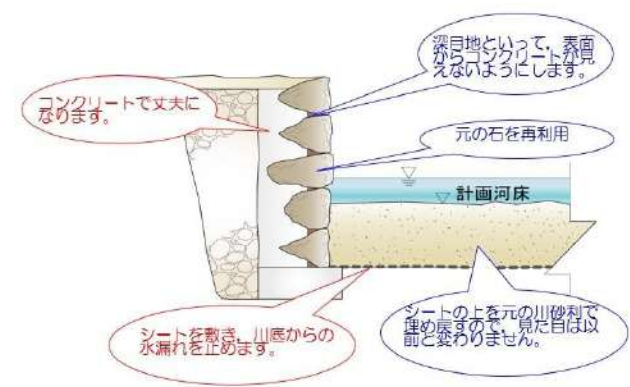
狭い道が多く、人と車が混雑する。よみせ通りは道路がそこまで
広くないが相互通行であり、歩行者が道によって車を避ける様子
がよく見られた。
しかしそのおかげで家賃が安くまた芸大も近いためアーティスト
が集まる。（萩荘など）

→道路を広くすることがいいわけではない。
片側車線を残して水辺空間を作る。
また、時間帯によって道路を閉鎖し、人の歩く
場所を確保する。物流に関しては交通の時間を
決める。

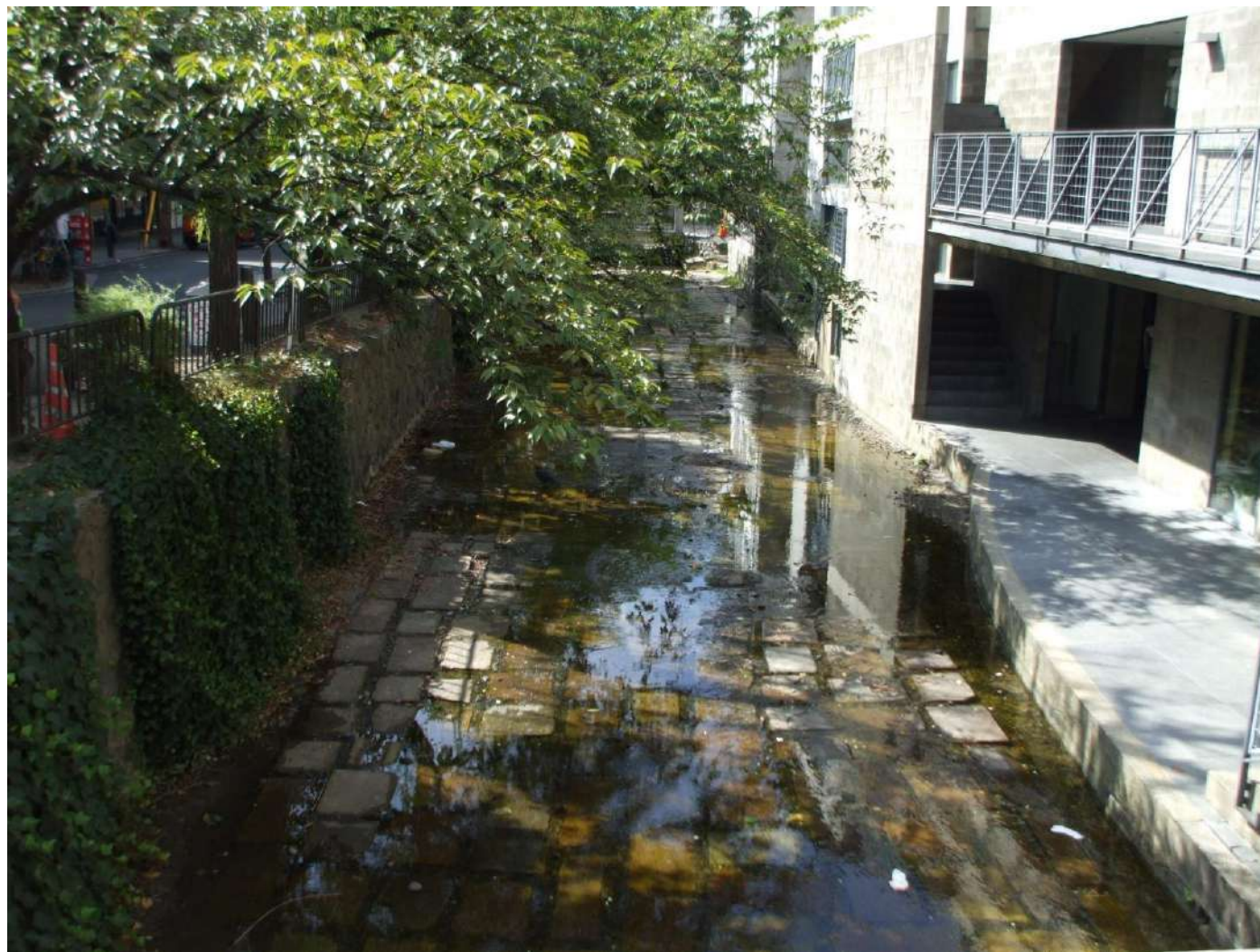
05 参考事例

水辺の復旧

水辺の復旧において実際に可能で参考にできそうな事例を集めた。



京都 高瀬川



05 参考事例

日野用水の水辺「水辺のある風景 日野 50選」より



05 参考事例



05 参考事例



1.2 Chapel of the Earth (メキシコ)



3 藍染川地下工事時の写真

4 清溪川 (韓国)

06 設計提案

水辺の復旧

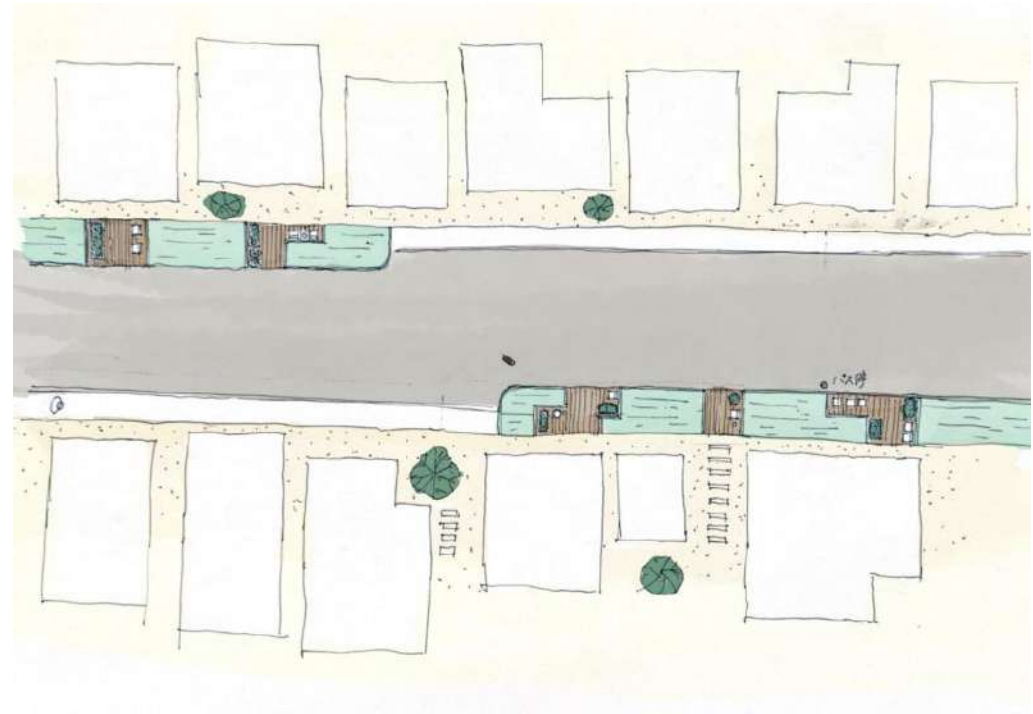
これまでの調査から藍染川と藍染川周辺に水辺を復旧する設計を提案する

よみせ通り

- ・道路の両側に幅2メートルの浅い水場を作る。
- ・道路と商店の間には休憩スペースを設けて、観光客が休めるようにしながら、店舗への出入りには影響を与えないようにする。部分的に植栽をして落ち着ける空間を作る。

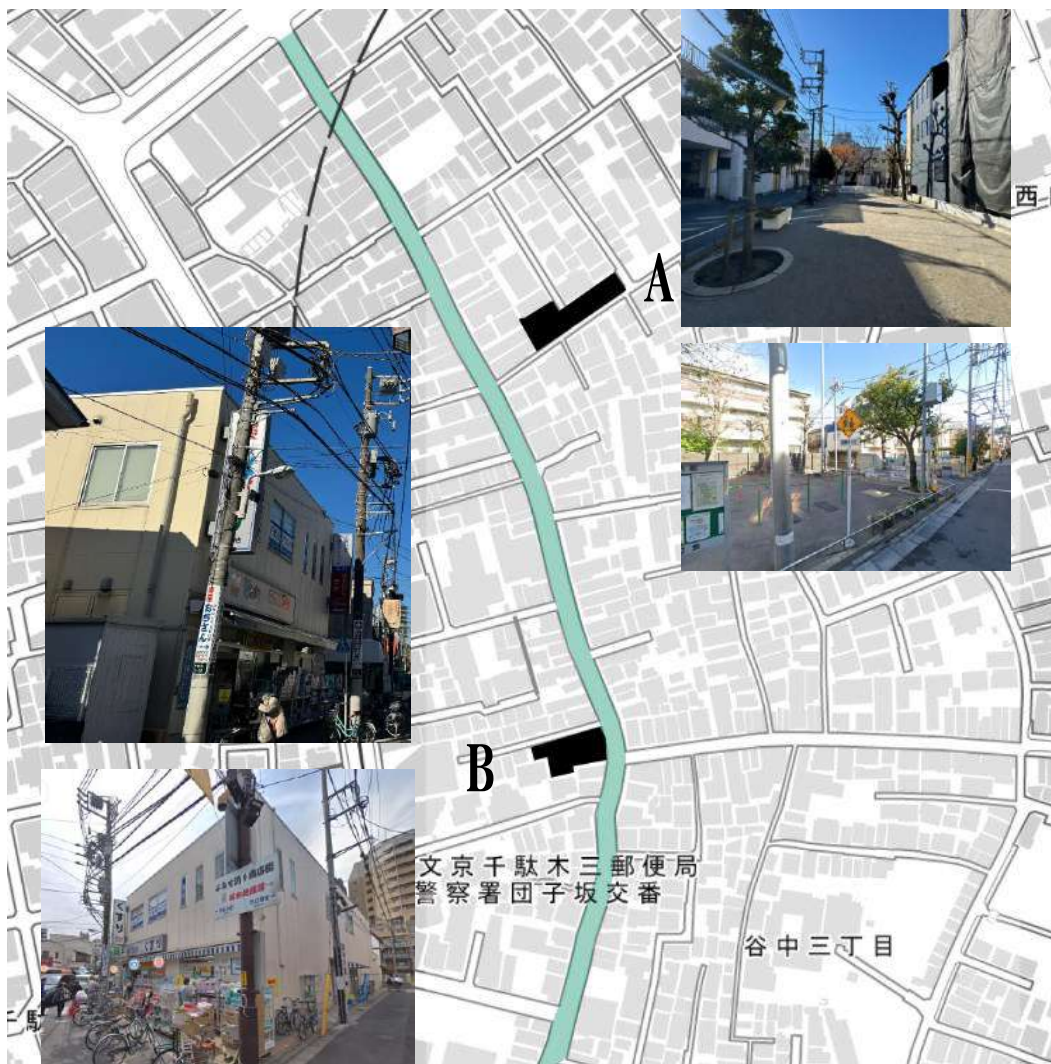


パース



部分平面図

06 設計提案



よみせ通り周辺

よみせ通りを中心として水辺を横に伸ばしていく。今回はその例としてsiteAとsiteBを考える。

設計エリア

A. 台東区立谷中児童遊園

住民向け: 小道に面し、プライバシーが確保されている。住宅が密集しており、車の通行量が少なく住民が集まりやすい。また、敷地面積が広い。

B. どらっぐぱす 谷中店

観光客向け: 交差点の角に位置し、交通の利便性が高い。商店街の終点にあり、人々が集まりやすい場所。

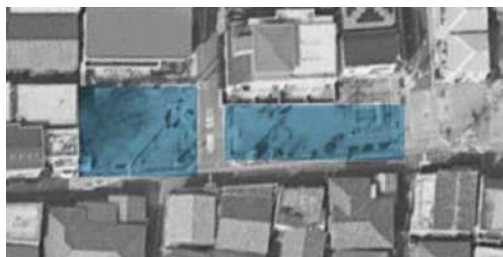
06 設計提案



Site A

暗渠を利用して防災拠点を設置し、水辺の景観を演出。一部河川を再現して、地下の水辺空間を整備。

地元住民向け



- 地元住民の活動を主とし、活動による騒音をできるだけ避ける。
- 地下空間は演劇や映画鑑賞ができる滞在エリアとして利用し、地上部分は既存の活動施設を保ちながら、一部の表面に水場を作り展望や休憩エリアを設ける。



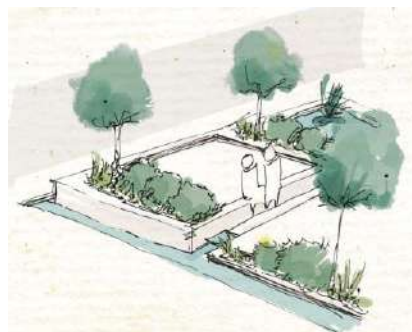
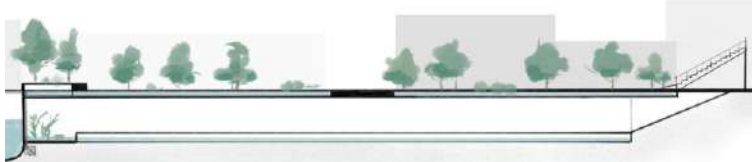
地上平面図



地下平面図

06 設計提案

Site A



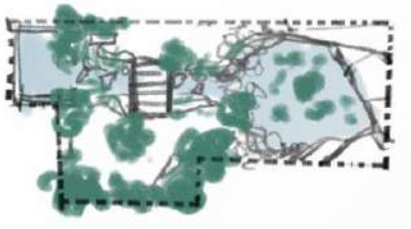
断面図・パース

06 設計提案



Site B

観光客向け



- 設計は人工的に作られた水路と滞留システムで、暗渠の水を引き入れて自然の湿地環境を再現した。
- 貯水池を2つ設け、一つは雨水を集めて防災用に貯蓄し、もう一つは公園内の植物の灌漑や再利用に使用する。これによって木々や庭園がすくすく育つ環境を作り出す。



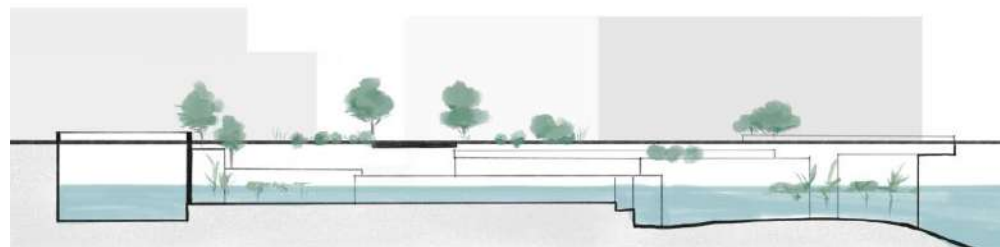
平面図

06 設計提案

Site B



パース



断面図

06 設計提案

へび道

道路の脇に細い水路を設置し、ガレージや玄関の前には橋をかける。
住宅街に小さい水辺を作ることによって、水のある暮らし、景色を再現する。



パース

